

りしなり。ニ、されど父より汝等に我が道はきんとする歎むる者(即ち父より出で往く眞理の靈の判り給ふとき、彼は我に就き隠し給ふべし。モまた汝等も隠せよ、そは汝等は初より我と共に在るが故なり。

第十六章

れ汝等の頭かまされざらんために、此等の事を汝等に誦たれり。二人々汝等を尊堂より顯べし。されどすべて汝等を殺す者、神に服事を願くと思ふ時は来りつあり。ヨ、されば彼等は此等の事を汝等に爲すべし、そは彼等は父を知らず、また我をも知らざるが故なり。四、されどわれ此等の事を汝等に誦たれり、即ち時の判りしとき、我をこれをいひしことを汝等の憶ひ出づるためなり。然るに初には此等の事を汝等にいはざりき、そはわれ汝等のうちに在りたればなり。五、されど我は今われを道はし給ひし者の許に往く、然るに汝等のうちも誰も我に、何處に往く、と問ふ者なし。六、されど此等のことを誦たりしが故に、我、汝等の心を誦たせり。七、されどわが眞理を汝等に告げん、我が去るは汝等のために益なり。八、我も申しずば、道むる者は汝等の許に来り給はざるべければなり。然るに我もし往かば、彼を汝等の許に道はすべし、八かくて彼判り給はば即ち就きて、また義に就きて世をして、これを自記せしめ給ふべし。九、即ち即ち就きて、彼等われを信せざることをなり。十、また義に就ては、われ我が父の許に往く、されば汝等復た我を看さることなり。十一、また義に就ては、此の世の靈の我がれしことなり。

二、われ何は汝等に多くの云ふべき事あれども、汝等は今担ふこと能はず。三、されど彼、眞理の靈の判り給ふとき、汝等をすべての眞理に導き入れ給ふべし。そは彼は已自らより誦たるにありず、されど何にてもその聞くところのものを汝等に誦たり、また来りつある事を汝等に知らしめ給ふべければなり。一、彼は我に榮光を降し給ふべし、そは彼は我がものより受け、かくて汝等に知らしめ給ふべければなり。二、すべて父のものも給ふものなり。此のゆへに、彼は我がものより受け、かくて汝等に知らしめ給ふべし、と我いへり。三、暫くして汝等われを看じ、されど復た暫くして我を自のあたり見るとし、そは我は父の許に往くが故なり。四、是の故に弟子等のうちの或る者互にいへり、暫くして汝等われを看じ、されど復た暫くして汝等われを自のあたり見るとし、と我等に云ひ給ひ、そは我は父の許に往くが故なり。五、と云ひ給ふ此等の事は何ぞや。六、是の故に彼等云へり、暫くと云ひ給ふ此等の事は何ぞや。我等その語たり給ふことを知らず。七、是の故にイエズ彼等の問かんと欲せしを知り給へり、乃ち彼等にいへり、暫くして汝等われを看じ、されど復た暫くして我を自のあたり見るとし、と我がいひしこの事に就きて、汝等互に驚ねあふや。三、誠に誠にわれ汝等に云はん、汝等は歡くべく、且つ泣き叫ぶべし、されど世は淨はん。また汝等は哀しまん、されどそは汝等は喜ぶべし。三、船遊まんとするときは哀あり、その時の到るが故なり。されど物見を在みたるときは、もはや彼はその靈を離れ出でず、世に人の生まれたる形のゆへなり。三

是の故に汝等もいまだ哀あり、されどわれ復た汝等を目のあたり見るとし。かくて汝等の心算を
 べし、且つその事を汝等より取り去る者なし。三またその日に汝等何をも我に問はざるべ
 し。誠に誠におれ汝等に云はん、汝等何に在りても我が名に在りて父に求むるものを、父はこれを
 汝等に與へ給ふべしと。四汝等今に在りて何をも求めざりき。求めん、
 されば受くべし、是れ汝等の事の満たざるためなり。五われ此等の事を傳へて汝等に語ら
 ざりし、されどもは世に語らざりし、されど明かに父に就きて汝等に知らしめんとする時は來
 りつゝあり。六その日に汝等我が名に在りて求めん。されば我は汝等のために、父に請はん
 と汝等に云はす。七もそれは父自ら汝等を惡にし給へばなり、それは汝等は我を惡にし、且つ我は
 父より出で來りしことを信じたるが故なり。八我は父より出で來れり、かくて世に判れり。
 復た世を離れ、且つ父の許に往く。

二兄弟等彼に云ふ、且よ、今汝は明かに語らざり給へ、且つ標を一つも云ひ給はず。三我
 等も汝のすべての事を知り給ひ、また人の汝に問ふべき事あはざるを知る。是に於て我等は
 神より汝の御出で來り給ひしことを信ず。四今汝等に許へ給へり、今汝等は信するが。五
 見よ、時は來りつゝあり、されば今到りぬ、即ち汝等は散らされておのおの己が所に往き
 かくて我を獨り遺すべし。されどわれ獨り居るにあらず、それは父われと共におはせばなり。六
 われ此等の事を汝等に語らざりし、是れ我に在りて平和を汝等の保たんとためなり。汝等世に在り

第十七章

ては觀あり。されど別ましかれ、我は世に應てり。
 一今此等の事を語らざり給へり、かくて目を天に擧げ且つ曰へり、父よ、時
 は到れり、汝の子も汝に榮光を歸するのために、汝の子に榮光を歸し給へ。二
 汝は彼にすべての例を治むる權を與へ給ひしほどに、彼に與へ給ひしすべての者、彼等に承の
 生を彼の與へんことを。三また汝の生とは、唯一の眞の神なる汝と、汝の使はし給ひしイエス
 キリストを知る地れなり。四われ地に於て汝に榮光を歸しまつれり、汝の我に與へ給ひし我が
 爲すべき行は、我これを究うせり。五されば父よ、世のありし前に、汝の許にて我がもちし榮
 光をもて、いま汝自身の許にて我に榮光を歸し給へ。六汝世より「選ひて」我に與へ給ひし人
 人に、われ汝の名を顯はせり。彼等は汝のものなりしが、これを我に與へ給へり。また彼等は
 汝の言を護れり。七今彼等は汝の我に與へ給ひしすべてのものは、汝よりあることを知る。八
 それは汝の我に與へ給ひし脚を彼等に與へたればなり。乃ち彼等はこれを受けて、我は汝より出
 で來りしことを眞に知り、且つ汝の我を使はし給ひしことを信じたり。九われ彼等に就きて請
 ふ、世に就きて誰にあらず、されど汝の我に與へ給ひし者に就きてなり、それは彼等は汝のも
 のなればなり。一〇またすべて我がものは汝のもの、また汝のものは我がものなり、されば我
 は彼等に在りて榮光を歸せられたり。一されど我はもはや世にあらず、されど此等の者は世
 に在り、されど我は汝の許に來る。觀たる父よ、汝の我に與へ給ひし彼等を汝の名に於て護り給

「是れ我等の如く、彼等の一たらんだめなり。二われ世に於て彼等のうち在りしとき、汝の名に於て彼等を譲りつゝありき。汝の我に與へ給ひし者を譲りしに、汝の子を除きては、彼等のうち一人だに亡びざりし、是れ經濟の成敗せらるるためなり。三またわれ今汝の許に来り、然るにわれ世に在りて此等の事を語らば、彼等のうちに成敗したる汝、われのを彼等の有つためなり。四われ汝の言を彼等に與へたり、然るに世は彼等を憎めり、是れわれに於てあざむき、彼等は世につきてあざむくが故なり。五我は汝の彼等を世より取り給はんことを請はず、されど汝の彼等を惡より譲り給はんことを。六われの世につきてあざむく如く、彼等は世につきてあざむき、我も彼等を世に使はせり。七我は汝の我を世に使はし給ひし如く、我も彼等を世に使はせり。八我の我を世に使はし給ひし如く、彼等を棄て給ひしは彼等のために我自身を棄て、是れ彼等も真理に在りて認めらるるためなり。九されどわれ神の爲のためのみ請ふにあり、我を信する者のためにも、請ふなむ。十見れんか一たらんだめなり。父よ、汝の我に「おはし」また我の汝に「在る」如く、彼等も我等に「在りて」一たらんだめ、汝の我を使はし給へることを世の信するためなり。十一また我は汝の我に與へ給ひし榮光を彼等に與へたり、是れ我等の一なる如く、彼等の一たらんだめなり。十二我は彼等に「在り、また汝は我に「おはす」これ彼等の一に究むるためにして、汝の我を使はし給ひしことを、汝の我を棄し給ひし如く、彼等を棄し給ひしことを世の知るためなり。十三父よ、弟子等と共にクトロンの河原の同側に由て來り給へり、そこに岡ありき。彼は弟子等とそれに入り來り給へり。十四またエマ、彼を付しつゝありし者も、此の場所を知れり、そはイエス殿よ、弟子等と共にそこに集ひ給ひたるが故なり。十五是の故にエマは祭司長等及びパリサイの人々より、兵隊を使丁等とを受けて、燃明と燧火と武器とをもちてここに來る。十六是に於てイエス已の上に来りつゝありし、その事を知り給ひたれば、由て來りて彼等に曰へり、誰を索むるや。十七彼に答へたり、ナザレ人なるイエスを。イエス彼等に云ひ給ふ、我なり。またエマ、彼を付しつゝありし者も、彼等と共に立ちてありき。十八是の故に彼等に、我なり、と曰ひしとき、彼等は後るに去り、且つ地に倒れたり。十九是の故に復た彼等に問ひ給へり、誰を索むるや。乃ち彼等云へり、ナザレ人なるイエスを。二十イエス答へ給へり、われ汝等に、我なり、といへり。是の故に汝等もし我を棄てるならば、此等の者を棄しおきて往かしめよ。二十一是れ汝の我に與へ給ひし者のうち、一人だに失

第十八章

「是れ汝の我を棄し給ひしことを、汝の我を棄し給ひし如く、彼等を棄し給ひしは彼等のために我自身を棄て、是れ彼等も真理に在りて認めらるるためなり。九されどわれ神の爲のためのみ請ふにあり、我を信する者のためにも、請ふなむ。十見れんか一たらんだめなり。父よ、汝の我に「おはし」また我の汝に「在る」如く、彼等も我等に「在りて」一たらんだめ、汝の我を使はし給へることを世の信するためなり。十一また我は汝の我に與へ給ひし榮光を彼等に與へたり、是れ我等の一なる如く、彼等の一たらんだめなり。十二我は彼等に「在り、また汝は我に「おはす」これ彼等の一に究むるためにして、汝の我を使はし給ひしことを、汝の我を棄し給ひし如く、彼等を棄し給ひしことを世の知るためなり。十三父よ、弟子等と共にクトロンの河原の同側に由て來り給へり、そこに岡ありき。彼は弟子等とそれに入り來り給へり。十四またエマ、彼を付しつゝありし者も、此の場所を知れり、そはイエス殿よ、弟子等と共にそこに集ひ給ひたるが故なり。十五是の故にエマは祭司長等及びパリサイの人々より、兵隊を使丁等とを受けて、燃明と燧火と武器とをもちてここに來る。十六是に於てイエス已の上に来りつゝありし、その事を知り給ひたれば、由て來りて彼等に曰へり、誰を索むるや。十七彼に答へたり、ナザレ人なるイエスを。イエス彼等に云ひ給ふ、我なり。またエマ、彼を付しつゝありし者も、彼等と共に立ちてありき。十八是の故に彼等に、我なり、と曰ひしとき、彼等は後るに去り、且つ地に倒れたり。十九是の故に復た彼等に問ひ給へり、誰を索むるや。乃ち彼等云へり、ナザレ人なるイエスを。二十イエス答へ給へり、われ汝等に、我なり、といへり。是の故に汝等もし我を棄てるならば、此等の者を棄しおきて往かしめよ。二十一是れ汝の我に與へ給ひし者のうち、一人だに失

はずと曰ひし言の成就せらるためなりしなり。一〇是の故にシモン・ペテロ劍を握ちければ、これを投げり、かくて祭司長の杖機を擧てり、またその右の耳を根元より切り放せり。またその杖機の名はドルコスなりき。一〇イエズスの故にペテロに曰へり、汝の劍を鞘に收めよ。父の我に與へ給ひし杯を飲まざるべけんや。

二是の故にかの兵隊と千人隊長とエグヤ人の使丁等と、イエズスを捕へたり、且つ彼を縛れり。十三かくて先づアソナスの許に連れ往けり。そは彼はその年の祭司長カヤバの別たりければなり。二また、民のために一人止ぶるは益なり、とエグヤ人に勧めし者はこの「カヤバ」なりき。二またシモン・ペテロと他の一人の弟子とはイエズスに従へり。またかの弟子は祭司長に知られたる者なりき、乃ち彼はイエズスと共に祭司長の申座に入り來りぬ。一六またペテロは外に行向處に立てり。是の故に祭司長に知られたるかゆ弟子、他の者用で來れり、かくて安ん守にいひ、且つペテロを連れ入れたり。一七是の故にペテロにその辨、問答六、汝も此の人の弟子等のうちにありや。彼云ふ、我はあらず。二八また奴僕及び使丁等は燈火をおこし、立ちて探まりつありき、そは欲かりしが故たり。さればペテロも彼等にまじりて立ち、且つ探まり附れり。一九是の故に祭司長はイエズスにその弟子等に就き、またその教に就きて問へり。二〇イエズスに答へ給へり、我は則かに世に語られたり。我はエグヤ人の所に集まること人の會衆にて、また廟殿にて常に教へたり、されど世に語られたることなし。三何ぞ汝は我に

問ふや。我が語だれることは聞きたる者に聞へ。且、此等の者は我がいひしことを知る。三餘るに此等の事を曰ひしとき、傍に立てる使丁等のうちの一人、汝は祭司長に答ふるにかくの如きか、といひつゝ密にてイエズスに一と打ち與へたり。三〇イエズスに答へ給へり、我もし惡く語たりしならば、その惡しきことに就きて隠せよ、されどもし真くば何ぞ我を打つや。三二アソナスは縛られたる彼を、祭司長なるカヤバの許に送れり。三三かくてシモン・ペテロは立ち且つ探まりつありき。是の故に人々彼にいへり、汝も彼の弟子等のうちなりや。彼は答へり、且ついへり、我はあらず。二四祭司長の奴僕等のうちの一人にて、ペテロがその耳を根元より切り放したる者の縁者云ふ、われ固にて彼と共に汝を見しにありや。二五是の故にペテロ復た否めり。然るに直に鷓鳴きぬ。二六是の故に人々イエズスをカヤバより廟に連れ往けり。然るに彼明なりき。されば彼等は逾越を喚ぶために、汚を受けざるやう廟に入り來らざりき。二七是の故にペテロ彼の許に出て來り且ついへり、汝等は此の人に逆らひて如何なる罪を持來れるや。三〇彼等答へ且つ彼にいへり、此の若もし非違者にあざりせば、汝に付さざりしものぞ。三一是の故にペテロ彼等にいへり、汝等彼を取れ、且つ汝等の掟に循ひて殺せ。是の故にエグヤ人彼にいへり、我等には誰を殺すことも律しからず。三二是れ彼の如何なる死にて、宛なんとし給ひしかを意味して曰ひし、イエズスの言の成就せらるためなりしなり。三三是の故にペテロ復た廟に入り來れ

頃なりき。かくて彼はエマナ人に云ふ、見よ、汝等の王なり。自然に彼等叫び出だせり、除け、除け、十字架につけよ。ピラト彼等に云ふ、われ汝等の王を十字架につくべけんや。祭司長等へたり、我等はカオサルの外に王なし。是の故にそのとき、彼の十字架につけられ給ふために、彼はこれを彼等に付したり。

されば彼等はオエヌを取り、且つ連れ往けり。そかくて彼は己が十字架を擔ひ給ひて、欄の場所と云はれ、ヘブル語にてゴルゴタと云はるる所に出で來り給へり。一八そこに於て彼等は彼を十字架につけたり。また彼と兵に他の者を二「人」此方と彼方に、即ちオエヌを市中に十字架につけたり。一五またピラトは稱へ名をも書きて、十字架の上に置けり、即ちかく書き給へり、チツレ人なるオエヌ、エマナ人の王。一六是の故に此の稱へ名を多くエマナ人は讀めり、それはオエヌの十字架につけられ給ひし場所は市に近く、且つヘブルまたギリシヤまたローマの語にて書かれたればなり。一七是の故にエマナ人の祭司長等ピラトに云へり、エマナ人の王と書く勿れ、されど、我はエマナ人の王なり、と彼はいへり、とせよ。一八ピラト答へり、我が書きたることはわれ書けり。一九是の故に兵卒等はオエヌを十字架につけしとき、その上衣を取れり、かくて四つに分ちておのおのにその一つを以てり。また下衣を取れり。されどこの下衣は上より織り通されたる物にて、縫ひ目なかりき。二〇是の故に彼等互に云ひあへり、それ計なくまで。されど誰が有になるべきか、それに就きていざ競を取らん。是れ、彼等

は巴自らのために我が衣を煩ち、また我が下衣のために襪を取ら、と云へる聖書の成就せらるるためなりしなり。

二三是の故に兵卒等は如何にも此等の事を偽せり。またオエヌの十字架に近く、彼の母と母の姉姉とクロバの淫ウリアとウダラのウリアと立てり。二四是の故にオエヌは母と、その傍に立てる彼の變し給ひしかの弟子とを見給ひて、母に云ひ給ふ、婦よ、見よ、汝の子なり。二五かくてかの弟子に云ひ給ふ、見よ汝の母なり。さればその時よりの弟子、彼を取りて己がものに入れたり。二六此の後オエヌはすべての事既に完うせられたることを知り給ひて、聖書の完うせらるるために、われ指く、と云ひ給ふ。二七是の故にそこに群の滿ちたる器ありき。乃ち彼等は海潮に群を置たし、且つヒロンにつけて彼の日に宛てがふ。二八是の故にオエヌ群を受け給ひしとき、曰へり、完うせられたり。かくて頭を垂れ髪を渡し給ひき。二九是の故に「此の日は」憐れなりしかば、エマナ人は安息日に體を十字架の上に留置かざらんために、彼等の髪を折りて取り除かれんことをピラトに請へり、そはその安息日は大なる日なりしが故なり。三〇是の故に兵卒等判れり、かくて彼と同一十字架につけられたる第一の者と他の者との髪を折れり。三一されど彼等のオエヌに到りしとき、彼等は既に彼の死に給ひしを見し故にその髪を折らざりき。三二されど「人」の兵卒等に於て彼の髪を突けり、されば直に血と水と出で來れり。三三かくて觀し者盡せり、さればその證は眞なり、また彼は汝等の

信するために眞を云ふことを知る。三六 そは此等の事は、その骨の一つをも動かさず、と一録されし聖書の成就せらるるために授けられたればなり。三七 且つ復た他の聖書は、彼等の期したる者を彼等は目のあたり見ると、と云ふなり。

三八 此等の事の後、アリマタのヨセフとて、イエスの弟子なりしが、ユダヤ人を懼るるによりて登したる者、イエスの體を取り去るためにピラトに請へり。乃ちピラトこれを許したり。是の故に彼は到れり、かくてイエスの體を取り去れり。三九 また最初に夜間に、イエスの許に到りし者なるニコデモも、没薬と麻膏との混合物を百斤ばかり携へて到れり。四〇 是の故に彼等はイエスの體を取り、かくて葬の準備にとて、ユダヤ人の例に循ひて、それを香料と共に麻布にて巻けり。四一 また彼の十字架につけられ給ひし場所に圍あり、且つその圍のうちに未だ籬をも置きしことなき新しき墓ありき。四二 是の故にユダヤ人の僱日なるによりて、そこに彼等はイエスを置けり、そはその墓は近かりし故なり。

第二十章

週の首の日に、アリマタのヨセフ朝まだき何ほ暗かりしとき墓に來れり、かくて墓より取り除けられたる石を顧る。二 是の故に彼は走る、且つシモンペトロの許と、イエスの體にし給ひしか他の弟子の許とに來る、乃ち彼等に云ふ、主を墓より取り去れり、且つ何處に置きしや知らず。三 是の故にペトロとか他の弟子と出で來れり、かくて墓に來れり。四 また二人は、墓に到りて、然るにかの他の弟子は、ペトロより疾く走り廻

めり、されば先づ墓に到れり。五 かくて顧みしとき彼は慄はれる麻布を融る、されど内に入らざりき。六 是の故にシモンペトロ彼に續きて來る、乃ち墓に入り來れり、かくて横はれる麻布を看る。七 また頭の上に在りし巾布は麻布と共に横へず、されど巻きて別の場所に離れてあり。八 是の故にそのときかの他の弟子、一番に到りし者も墓に入り來れり、乃ち見たり、且つ信せり。九 そは彼等は必ず彼は死人のうちより起たさるべからず、と一録されたる聖書を未だ知らざりしが故なり。一〇 是の故に二人の弟子等は復た己がもの許に去れり。二 然るにアリマタは墓に對ひて泣きつつ外に立てり。是の故に彼は泣けるまま墓の内に屈みたり。三 然るにイエスの體を置きし處に、一人は頭の方に、一人は足の方に坐する、白き衣を着たる二人の天使を看る。四 かくてかれら云ふ、婦よ、何ぞ泣くや。彼等に云ふ、そは我が主を取り去れり、且つ何處にそれを置きしや知らざるが故なり。五 また彼は此等の事をいひつつ後ろの方に向きかへたり、かくて立ち給ふイエスを看る。然るにそのイエスにおはすことを知らざりき。六 イエス彼に云ひ給ふ、婦よ、何ぞ泣くや、誰を慕むや。彼は圍たなりと思ひつ彼に云へり、主よ、汝もし彼を繋ひしならば、何處に置きしかをいへ、さればわれ彼を取り去るべし。七 イエス彼に云ひ給ふ、アリマタ。彼は振り返りつ彼に云ふ、ラホニ、即ち師よと云ふことなり。八 イエス彼に云ひ給ふ、我に掴る勿れ、そはわれ未だ我が父の許に昇らざればなり。されど我が兄弟等に往き、且つ彼等にいへ、我は我が父即ち汝等の父、

また我が神即ち汝等の神の許に居る。イエサダラのツリアは主を親しむこと、此等の事を主の目しむこととを弟子等に知らしめんとて来る。

一九 是の故に湖の首の目したるその目の分なりしが、弟子等ユダヤ人の懼のゆへに集まれり。湖の戸口を鍵し置きたるに、イエス到り給ひ、且つその真中に立ち給へり。かくて彼等に云ひ給ふ、平和汝等にあれ。三〇 またかく曰ひて、後一息を給へり。是の故に弟子等主を見て喜べり。二 是の故にイエス復た彼等に曰へり、平和汝等にあれ。父の我を便はし給ひしが如く、我も汝等を遣はさん。三 またかく曰ひて、後一息を給へり。父の我を便はし給ひしが如く、我も汝等を遣はさん。三 汝等誰の罪を赦さんとするとも彼等に赦され、誰の罪を留置かんとするとも置置かるなり。二四 然るにトマス、十ニのうちの一入、トマスと云はる者イエスの到り給ひしとき、彼等のうちに在らざりき。二五 是の故に他の弟子等彼に云へり。我等は主を親たり。然るに彼は彼等にいへり、我もしその手に釘の痕を見、また我が指をその釘の痕に入れ、また我が手を彼の脇に差し入るにあらざば、必ず信ぜじ。二六 かくて八日の後弟子等復た内に在りき。またトマスも彼等と共に在りき。戸口を鍵し置きたるにイエス來り給ふ。かくてその真中に立ち且つ曰へり、平和汝等にあれ。二七 かくてトマスに云ひ給ふ、汝の指をここに持ち來れ、且つ我が手を見よ。また汝の手に持ち來れ、且つ我が脇に差し入れよ。儼なき者となる勿れ、されど懼ある者とてな

第二十一章

れ、トマス乃ちトマス答へ且つ彼にいへり、我が主、また我が神。二九 イエス彼に云ひ給ふ、われを親しが故にトマスよ、汝は信ぜり。屬なる者は見しして信する者なり。三〇 是の故に此の小巻物に錄されざる他の徴をも多く、イエスは弟子等の面前にて盛し給へり。三 されど此等の事は、イエスは手リスト、神の子におはすことを汝等の信するため、且つ信じて彼の名に在りて生を汝等の保たんとために錄されたり。

此等の事の後、イエス復たツペリヤの海の邊にて、弟子等に己自らを顯はし給へり、即ち彼はかくの如くに顯はし給へり。ニシモン、ペテロ、トマス即ちトマスと云はる者と、ガリラヤのカナの者なるサタナエルと、ゼベダイの子等と、弟子等のうちの他の者二、八とは一處にありき。ニシモン、ペテロ、彼等に云ふ、我は漁に往く。彼等云ふ、我等も汝と共に來る。かくて彼等は出でて直に船に乗り込めり。然るにその夜一夜何をも獲ざりき。四 かくて既に夜明となりしとき、イエス岸に立ち給へり。されど弟子等そのイエスにおはすことを知らざりき。五 是の故にイエス彼等に云ひ給ふ、汝等よ何ぞ食へ物あるや。彼に答へたり、吾々乃ち彼等に曰へり、網を船の右の方に下るせ、されば見出さん。是の故に彼等下りしたり、然るにもはやそれを魚の群より曳き上ぐることはできり。六 是の故にイエスの愛し給ひしかの弟子、ペテロに云ふ、主におはすぞ。是の故にシモン、ペテロは、主におはすぞ。と聞きしとき、上衣を纏へり、そは裸なりしが故なり。かくて彼は

聖使徒等の行爲

第一章

テオセロよ、我は如何にも、エスの爲し始め、また欲へ始め給へるすて

の事に就きて前の言を作り、三その選ひ給へる使徒等に聖靈によりて命ぜし

後、擧げられ給ひし日にまで及びり。三彼は彼等に多くの證據をもて、彼が昔を受け給ひし

ちに己自らの生くることを現はし、四十日の間彼等に觀られ給ひて、朝の國に就きての事を云

ひ給へり。四且つ彼等と共に集まりて、命じ給ひけるは、エロソルより離れずして、汝等が

我に聞けるところの父の約束を待つべし。五そはヨハネは如何にも水にてバプテスマしたれど

も、汝等は久しからずして聖靈にてバプテスマせらるべければなり。六是の故に彼等伴ひ來り

て彼に問ふて、云ひけるは、主よ、汝は此の時に於て國をイスラエルに復し給ふや否や。と乃

ち彼等に對ひて曰へり、父が己自らの權のうちを置き給へる、時または期を知るとは汝等の

ものにあらず。八されど聖靈の汝等に到り給ふとき、汝等力を受けん、かくてエルサレム及び

ユダヤ全國、サマリヤ并に地の極にまで、我がために證人たるべし。九また此等の事を曰ひ

しとき、彼等は稱して、彼は擧げられ給へり、かくて雲は彼等の目より彼を運び去れり。一〇

また彼の往き給ひしとき、彼等は天を觀望めつつありしに、且よ、二人、白き衣服にて彼等に

驚いて立てり。……彼等かくていへり、人々がカラヤ人々、汝等は天に向ひて何まつらつら親をつつや。汝等を離れて天にまで擧げられ給へる此の者、イエスは汝等の天に往き給ふ彼を遣はる様にてその如く來り給はん、三 そのとき彼等はエライオンと呼ぶ山よりエルサレムに歸れり。この山はエルサレムに近くして安息山の道のりなり。

二 かくて彼等は入り來りしとき、階上の室に就かれり。此處は「ソロとソロアとヨハネとアソフレ、ビリギとトマス、マセトロアとマタイ、アルバイの「子なる」ニコラと熱心者なるシモン及びヤコブの兄弟」エズの置まれるところなりき。四 此等の者はすべて心を一にし、

一 またそれらの日に、「ソロは弟子等同じ處に在りし者、その數凡そ百二十人の眞中に立ちていへり、「人々兄弟よ、イエスを捕へし者に至明となりしエズに就きて、聖なる數々とその日によりて豫め自ひし、此の聖實は必ず成就せざるべからざりしなり。五 是は彼は我等と共に數へられ、此の聖事の分を得たればなり。六 是の故に此の者は如何にも不義の報の地所を得、また何に落ちて擧出さけ、驅逐すてて逃しり出でたり。七 かくてその地所は彼等の己が國語にて「クエグア」と呼ばれて、エルサレムに住めるすべての人々に知るに至れり、即ち血の地所なり。八 是は諸の卷のうちに、彼の住家は毀れ果てしめよ、その中に人を住ましめざれ、また彼の見守人の職を他人に得しめよ、と錄されたればなり。九 是の故に必

す主イエスの、我等のうちに入り來り、且つ出で往き給ひしすべての時の間、三ヨハネのバプテスマより始まり、我等を離れて擧げられ給ひし日に至るまで、我等と集まりたる人々、此等の者のうち一人「我等と共に彼の庭の證人とならざるべからず。三 かくて彼等はエズと稱へられ、ブルガベと呼はるるヨセフと「ソツアの二人」を立て、四 且つ祈りていへり、汝等、すべての者の心を知り給ふ者よ、此の聖事の分と使徒の職を受くるために、五 此の二人のうち乳れを逆ひ給ふかを示し給へ、エズは已に處に往くべしとこれより泣り降ちたり。六 かくて彼等は彼等の體を取りしめしに、彼は「ソツア」に落ちたり、乃ち彼は十一の使徒等のうちに加へられたり。

第二章

またベンチヨヌの満つる日に、彼等はすべて同じ處に心を一にしておりき。二 かくて俄に烈しき風の、吹きまくるが如き聲の天より來りて、彼等が坐する家を全く満たせり。三 また火の如き分れたる舌、彼等に現はれて一人一人の上に盛かる。四 乃ち彼等はすべて聖靈にて満たされ、且つ靈の彼等に語らしめ給ふままに、異なる言葉にて語り始めたり。五 然るに敬虔なるユダヤ人等、天下のすべての國人のうちよりエルサレムに「來り」住みかへりしが、六 この聲發りたれば、大衆集まり來りてうち合へり。七 是は一人一人己が國語を彼等の語たるを聞きだればなり。八 またすべての者驚き且つ異しみて、互に云ひけるは、見よ、驚たるこの此等の者はすべてカラヤ人にあらずや。九 されば如何にし

且つ聞くところの此のものを注ぎ給へり。三〇 是は又と云は天に昇りしことなし、されど彼は自ら云へばなり、且主は我が主にして、われの汝の歌を汝の足の足履に据うるまで、我が右手に坐せ、と曰へり。三十一 是の故にオスマエルの家のすべてをして、神は汝等が十字架につけし此の者即ちオスマを、主ともなし奉りしとをもなし給ひしことを確かに知りしゆ。

三十二 かくてこれを聞きしとき心を刺され、且つペテロとその餘の使徒等に對ひていへり、人兄弟よ、我等何を爲すべきや。三十三 乃ちペテロ彼等に對ひて述べけるは、悔ひ改めよ、且つ汝等おのれの罪を赦さるために、オスマキリストの名に於てバプテスマせしめられ、されば汝等は濯濯の屍體を受くべし。三十四 是を此の約束は、我等の神が召し給ふところの、汝等及び汝等の兄弟、共にすべての遠き者のためなればなり。三十五 また此の他なほ多くの言をもて彼は靈に説き、且つ勸めて云ひけるは、此の曲がれる代より赦はれよ。三十六 是の故に人々喜びて彼の言を受け、且つバプテスマせられたればその日凡そ三千の魂加へられたり。

三十七 かくて彼等は使徒等の教のうち、またその複しき交のうち、またパンを擘くことと靈のうちを餘なかりき。三十八 さればすべての魂に聖を在せ、また使徒等によりて多くの奇蹟と權と現はれたり。三十九 またすべて信仰せし人々は同じ處にありて、すべての物を共進せり。

四十 また彼等は其の資産を有る物とを賣りて、おのれの必要に預ひてこれを頒け與へたり。四十一 また彼等は日々餘念なく、心を一にして神のうちに居り、また家に預ひてパンを擘き、

三十三 かくて彼等は使徒等の時に當りて、ペテロとヨハネは共に神殿に上れり。三十四 母の胎より誕なりし或る男運はれてありき、彼は神殿に入り往く人々より施を求むるために、日に預ひて神殿の美と云はる門の傍に置かれたり。三十五 彼は將に神殿に入らんとするペテロとヨハネを見て、施を受けんことを願へり。三十六 乃ちペテロはヨハネと共に彼を祝ひていへり、我等を觀よ。三十七 されば彼は何物かを彼等より受けんことを期して、彼等に氣を附けたり。三十八 然るにペテロにいへり、銀また金はわれに無し、されど我が有つところのもの、此のものをわれ汝に與ふ、ナザレ人なるイエスキリストの名に於て起ちて歩め。三十九 かくて彼は右の手にて杖を執へて起したり、乃ちその足を蹠骨と怒ち置くなれり。四十 乃ち躍り上りて立ち且つ歩みり、かくて歩みつつ、また躍りつつ、また神を讚美しつつ、彼等と共に神殿に入りぬ。四十一 またすべての民は歩みながらに、神を讚美する彼を見たり。四十二 かくて彼等は此の者は施を「受けん」ために、神殿の美門の傍に坐したる者なることを善かに知り、彼の上に登りし事のために、衆とて驚たされたり。

四十三 また驚きたる觀者のペテロとヨハネとにすがり居りければ、民みな大に駭き、シロモンの處と名くる處にて、彼等の許に走せ集まれり。四十四 さればこれを見て、ペテロ民に對ひ答

三十三 かくて彼等は使徒等の時に當りて、ペテロとヨハネは共に神殿に上れり。三十四 母の胎より誕なりし或る男運はれてありき、彼は神殿に入り往く人々より施を求むるために、日に預ひて神殿の美と云はる門の傍に置かれたり。三十五 彼は將に神殿に入らんとするペテロとヨハネを見て、施を受けんことを願へり。三十六 乃ちペテロはヨハネと共に彼を祝ひていへり、我等を觀よ。三十七 されば彼は何物かを彼等より受けんことを期して、彼等に氣を附けたり。三十八 然るにペテロにいへり、銀また金はわれに無し、されど我が有つところのもの、此のものをわれ汝に與ふ、ナザレ人なるイエスキリストの名に於て起ちて歩め。三十九 かくて彼は右の手にて杖を執へて起したり、乃ちその足を蹠骨と怒ち置くなれり。四十 乃ち躍り上りて立ち且つ歩みり、かくて歩みつつ、また躍りつつ、また神を讚美しつつ、彼等と共に神殿に入りぬ。四十一 またすべての民は歩みながらに、神を讚美する彼を見たり。四十二 かくて彼等は此の者は施を「受けん」ために、神殿の美門の傍に坐したる者なることを善かに知り、彼の上に登りし事のために、衆とて驚たされたり。

四十三 また驚きたる觀者のペテロとヨハネとにすがり居りければ、民みな大に駭き、シロモンの處と名くる處にて、彼等の許に走せ集まれり。四十四 さればこれを見て、ペテロ民に對ひ答

へけるは、人々イエス人よ、何ぞ此の事を異しむや、或ひは我等が己自らの力、または
 心にて彼を歩ましめしが如く、何ぞ我等を鞭撻むや。ニアラムまたオサクまたサ
 コアの神、我等の先祖等の神は、その僕イエスに祭光を降し給へり。汝等は彼を付し、またサ
 ラトがこれを鞭さんと定めしとき、その前にて彼を吞みたり。二四 かくて汝等は聖き且つ義き
 者を存みて、人を殺せる者を汝等に異とらんことを求め、二五 度つて汝等は生の杖を授けり。
 神はこれを死人のちより起し給へり、我等はこの證人なり。二六 されば彼の名の信仰にて、
 彼の名は汝等が稱とせよ、また知るところ、また知るところ此の者を強くせり。即ち彼によりての信仰は、
 すべて汝等の前にてかくて完き徳儀を彼に異とたるなり。一七 されば各兄弟よ、我は汝等も汝等
 の長等の如く、知りしして行へることを知る。一八 されば神はすべての聖者等の口によりて、
 キリストを宣しむることを業め宣傳し給ひしことを、その如く成就し給ひしなり。一九 是
 の故に汝等の罪を抹し去るために樹ひせめよ、心を強へせ、即ちこれ非の類より中心の期
 の到らんため。二〇 また汝等に業め宣傳し給ひし後、イエスキリストを彼の汝等に使はし給はん
 ためなり。二一 彼は汝等より聖なるすべての聖者等の口によりて、神の語たり給ひしすべての
 物の回復する時まで、必ず天に傳言せられ給はざるべからず。二三 是はモサセは如何にも先祖
 等にいわれたればなり、主、汝等の神は、我の如き一人の聖言者を汝等のちより起し給は
 ん、その汝等に聖なるすべての事に預ひて使えり。二四 さればすべての魂、かの聖言

第四章

かくて彼等、民に語たりつありしとき、祭司等と神殿司及びサドカイの人
 人、彼等の群につか来り、二その民を教へ、且つ死人のちよりの事を
 イエスに於て宣傳ふるにより、心を備ませり。二三 されば彼等は手を彼等にかけて、明くる日ま
 で留置場に預けり。そは既に夕なりしが故なり。二四 されどその言を聞きたる多くの人が信じた
 れば、その男の數大凡そ五千となれり。二五 かくて明くる日になりて、長老及び長老等并に祭司
 等、また祭司長なるアナナ、またカヤパ、またヨハネ、またアレキサンドロ、并に祭司長の
 一族たりし者、すべてエルサレムに集まれり。二六 かくて彼等二人をその真中に立て、
 彼等尋ねけるは、汝等は何の力または何の名に於てこれをして爲しや。二七 其のときペトロ聖靈に
 て満され、彼等に對ひていり、民の長老及びキエルの長老等よ、我等もし今日かの期
 き人に「偽し」辯き行に就き、如何にして此の者は癒されしかを論べられなば、二八 汝等の

十字架につけしところ、神の死人のうちより起し給ひしところの、ナザレ人なるイエスキリス
トの名に於て、(即ち)彼に於て、此の者は汝等の面前に他に立つことを、汝等のすべてとイエ
スキリスの民のすべてに知らしめらるるなり。二此の者は汝等造家師によりて無價値とせられ
たるところの石にて、門の首石となれるところのものなり。三且つ彼は他に一もあること
なし。それは天下にその名に於て必ず汝等の敬はれざるべからざる、他の名を人のうちに與へ給
はざればなり。

一四 彼等ベテロとヨハネの歌することなき(聖)を、またその文字なく、また測算なき
人々たることを驚りて嘆しめり、且つ彼等はそのイエスと同にありし者なることを驚かに知り
たり。一五 また彼等と同に立てる靈きれたる人を觀しかば、云ひ消すことを得ざりき。一六 さ
れど彼等に命じて集議所の外に去らしめ、相語りて、一七 云ひけるは、我等は此の人々に何を爲
すべきや、それはかく著しき彼の、彼等によりて續りたることは、エカクピアに仕むすべしとの人々
に顯はれたれば、これを存むこと難はざればなり。一八 されど民のうちに向ほ泣まらざるや、
彼等を責かして、もはや此の者に於て一人にも話たることなからしむべし。一九 乃ち彼等を召
して、イエスの名に於て一切語る勿れ、また敬ふ勿れ、と命ぜり。二〇 然るにベテロとヨハ
ネと彼等に於ていへり、神に聽くよりも汝等に(禮か)ば神の面前にて穢なるや存や、汝等
これを斷ず。二一 されば我等は是れしところ、また聞きしところのものは、これを話たざざるを

得ざればなり。三 されど彼等は民のゆへに、如何にして此の二人を擲すべきか、何をもし出
ださざりければ、更に責かして去らしめたり。それは人々すべてかの發りしことのために、神に
榮光を歸したればなり。三 されば此の聲の發りし、かの人は四十歳餘なりければなり。

三 かくて彼等は去らしめられしとき、已か(同志の)人々の許に判り、祭司長等及び長老
等のいひしことを報じたり。四 されば彼等はこれを聞きしとき、心を一にし、神に對ひ密
を掲げていへり、至上の權をもち給ふ者よ、汝は天と地と海と、その中に在るすべてを造り給
ひしところの神におはします。五 汝は汝の僕なるダビデの口によりて、何故に國人は驕き立
ち、民等は強しきことを謀るや、六 地の王等は並び立ち、また長等は主に逆らひ、またその
キリストに逆らひて同じ處に集まれり、と曰へり。七 されば汝の許そそぎ給ひし、聖なる汝の
僕イエスに逆らひて、ヘロデもポンテオピラトも、國人及びイスマエルの民と同に、三 かく
なるべしと汝の手と汝の旨とにて強め定め給ひしことを爲さんとて、眞に集まりたればなり。
五 いま主よ、彼等の者を覆はし、汝の奴僕等に、あらゆる大膽をもて汝の言を誦たることを
得しめ、三〇 聲のために汝の手を仰べ、汝の聖なる僕イエスの名によりて、徴と奇跡とを現は
し給へ。三一 かくて彼等が祈願せしとき、その集まれる處揺り動き、すべての者聖靈にて満た
され、俯りし神の言を話たり。

三 また信じたるかの大衆の心と魂とはすべて一なりしかば、如何なる有る物をも誰一人我

がものなりと云へる者なく、まればとすての物を通せり。また徒等は力をもて、
 幸オエヌの腰の籠を立てれば、大なる源徒等すての上におりき。ヨ、そは彼等のうちには
 一人の乏しき者もなかりければなり。そは地所成ひは家屋を有つ者すてこれを賣りて、そ
 の賣りたる物の價を換へ來りて、又徒等の足下に置きければ、おのおの必用に預ひて領
 け與へられたるが故なり。

又またクレチに生まれたるシ人にて、徒等にアルナハ、譯せば、駄の子、と稱へられた
 る。シ人は、其山を有しが、それを賣りたる金子を持ち來りて、徒等の足下に置きたり。
 第五 章 然るに或る人、名はアマテ、その妻サフビラと、同に資産を賣りて、三その
 價をきて返し、その幾分を持ち來りて、徒等の足下に置きり、その妻も與
 り知るなり。又まればとすての物、アマテと何故にサマテ、汝等の心を漸たし、汝は聖な
 るに對ひて來き、且つ地所の價を割きて返さんとせしや。又汝の手に返れるときは、汝
 に賣りなきざりしか、また賣りしとも汝の權のうちにおりしにあらずや、何故に汝の心のうち
 に此の事企てしや。汝は人に對ひて欺きしにあらず、また汝の神に對ひて、偽るなり。又ま
 ればアマテ、これらの言を聞き、倒れて息絶えたり、さればこれらの事を聞きたるすての者
 の上に大なる憐れり。又されば若き人々、短ちて彼を包めり、また持ち出だして葬れり。セカ
 くて約を三時ばかり彼になりて、置りし事を知らずして彼の妻も入り來れり。又乃ち、アマテ

に答へたり、我にいへ、汝等はこれ程の價に地所を賣りしや否や。乃ち彼いへり、然り、
 それ程なり。又然るにアマテ彼に對ひていへり、汝等は一致して主の靈を試むるは何故ぞや。
 見よ、汝の夫を賣りし人々の足は門口におり、彼等は汝をも擁び出ださん。かくて彼は忽
 ちアマテの足下に倒れて息絶えたり。乃ち若き人々入り來りてその死にたるを見出だせり、そ
 れば持ち出だして彼の夫の傍に葬れり。一、されば大なる恤、全集會と、此等の事を聞けるす
 ての者の上に来れり。

二、また徒等の手によりて多くの徴と奇跡と民のうちに見はれたり。また徒等はすて心
 を一にしてアマテの庭におりき。三、されど其餘の者は一人も敢て彼等に箱ひ附かざりき、
 されど民は彼等を崇めたり。四、されば信する者多々多く、男の大衆もまた婦の大衆も主
 に加はりぬ。又また人々、病める者を大路上に擁ひて擔ひ出だし、小床また床の上に置きり。
 是れアマテの來るとき、せめてはその影だにも、徒等のうちの誰かを載ぶためなりしなり。一、
 またエルサレムの圍の市々の大衆も病める者また穢れたる靈に惱める者を擁ひて集まり來り、
 みな癒されたり。

一、然るに祭司長及び彼と聞にありしすてのサドカ、宗の人々、如にて滿まされつ起て
 り、かくて手を徒徒等の上にかき、且つ公の留置場に取り。二、然るに主の使、夜の間に
 來じて彼等の戸を開き、且つ彼等を通れ出だしていへり、三、往け、且つ立ちて神殿にて此

の生の詞をすべての民に話たれ。二 されば彼等開きて夜明け神殿に入り來り、且つ數つ
 おりき。然るに祭司長及び彼に伸へる人々語りて、隣會及びイスラエルの子等の長老衆を衆く
 召し集め、かくて彼等を連れ來らしめんとて二人を「糠屋」に使はせり。三 然るに使丁等語り
 て、糠倉のうちには彼等を見出ださざりき。乃ち歸りて報じ、三 云ひけるは、如何にも糠屋は
 極めて堅く鍵せられ、且つ密り人等は戸の前に外に立つを見出だせり。されど聞きて、内に誰
 をも見出ださざりきと。二 されば彼等の此等の言を聞きしとき、祭司等もまた神殿もまた
 祭司長等も、如何になりゆくべきかと、彼等に就きて心惑へり。五 然るに或る者語りて彼等
 に報じて云ひけるは、見よ、人々、汝等の権在に置きたる者どもは、神殿のうちには立ち、且つ
 民を教へつありと。六 そのとき神殿司は使丁等を伸ひ去つて、彼等を連れ來りたれど、衆
 力をもてにおらず、その民を懼れたればなり、是れ石たれざるためなりなり。七 かくて彼
 等を連れ來りしとき、彼等はこれを隣會のうちに立たしめたり。乃ち祭司長則ち、三 云ひけ
 るは、我等は命令もて此の名に於て教ふる勿れ、と汝等に命ぜしにあらざるや。されど見よ、汝
 等は汝等の教をもてエルサレムを滿たせり、且つ此の人の血を我等の上に踏せしめんと企つ。
 二 然るに「テロ及び使徒等」等へていへり、人に順はんより神には必ず順はざるべからず。
 三 我等の先祖等の神は、汝等が木に懸けて殺せしところのイエスを起し給へり。三 神は
 イスラエルに悔ひ改と罪の赦とを興へんために、此の着を長としました教主として已が右手に

上げ給へり。三 また我等は此等の詞につきて彼の證人なり、且つ彼に願ふ者に神の與へ給ふ
 聖なる靈も「然り」。

三 然るに彼等は聞きて、怒に堪へ得ざりき、さればこれを殺さんと協謀せり。三 四 されど
 バリサイの人にて、すべての民に教はる教法師、その名はガマリエルと云ふ者、隣會のうち
 に立ち、命じて少時使徒等を外に出ださしめ、三 且つ彼等に對ひていへり、人々イスラエル
 人よ、汝等が此の人々に爲さんとすることに就きて自ら心せよ。三 五 是は此等の目の以前に、
 手ウが起つて已自ら或る者なりと云ひ、これに結び附きし者の數凡そ四百一人ありしが、彼
 は殺され、また彼に説き伏せられたるすべての者は、散され、且つ跡なきに至りたればなり。
 三 七 此の後、戸簾登殿の日に於て、ガリラヤ人なるユダ起てり、かくて多くの民を引き抜きて
 彼に從はしめたり、されど彼は亡び、また彼に説き伏せられたる者は盡く遠く散らされたり。
 三 八 されば今われ汝等に云はん、此の人々より離れてその爲すに委せよ。是は此の企或ひは此
 の行、もし人より出づるものならば亡ぶべし。三 九 されどもし神より出づるものならば、汝等
 はこれを亡ぼすこと能はず、恐らくは汝等神に對らひて戰ふ者なることを見出だす之ければな
 り。四 〇 乃ち彼等は其の類に順ひ、使徒等を召して打ち、イエスの名に於て説たる勿れ、と命
 じて去らしめたり。四 一 是の故に彼等は彼の者のために、辱めらるるに値するものとせられた
 ることを喜びつ、隣會の類より「去り」柱作り、三 かくて彼等は日ごとに神殿にまた家

に預ひて教をなし、また福音書イエズスに宣傳して止まざりき。

第六章

されど此等の日に、弟子等増し加はりつゝありしとき、ヘブル語の人々に對ひてギリヤシヤ語の人々の眩くこと發したり、

それは十二は弟子等の大衆を召していへり、神の言を措きて食卓に集ふるは、我等のために過ひたるとにあらず。

是の故に兄弟よ、聖靈と智識とにて滿ちたる證ある者、

七(人)を汝等自らのうちより聖別けよ、我等その人々に此の聖事を托し、且我等は

神と言の奉事とに餘念なかるべし。五かくて此の言は大衆のすべての面前にて著はれたり、乃

ち彼等は信仰と聖靈とにて滿ちたる人なるステパン、またヒリガ、またフロコ、またニコノ

ル、またテモン、またバルマナ、またユシクケの歌祭者なるニコラを選びて、六これを使徒

等のの前に立たしめたり、されば彼等は斬りて手をその人々の上に接けり。七かくて神の言は

弘まり、また弟子等の數エルサレムに一方ならず増し加はりき、また祭司等の大なる群も信仰

に服はせられたり。

八かくて信仰と力とにて滿ちたるステパンは、民のうちの大なる奇跡と徴とを爲せり。九然

るにリベルチンと云はれる會堂即ちクレネ人、またアレキサンデリア人、またキリキヤ、またサ

ヂヤより來れる人々の(會堂)のうちの人々、起ちてステパンと論せり。一〇されど彼等

は彼が依りて語たるところの、その智慧と靈とに遊ばせりと能はざりき。一一そのとき彼等は

人々を驚かして云ひけるは、我等は彼のモラセと神とに向ひて冒の詞を語たるを聞けり。二

また彼等は民及び長老等並に學者等を煩り立てたり、されば彼等はつかつか來りて彼を捉へ、

且つ議會に連れ往けり。三また彼等は偽の證人を立てて云ひけるは、此の人は此の聖なる所

と捉へてに遊らひて、冒の詞を語たりて止めざる者なり。四我等は、サガシ人なるオニス、

此の者はこの所を毀ち、且つモラセが我等に傳へし例を拵ふべし、と彼が云へるを聞きたれば

なり。五されば議會に坐する者すべて彼を離れしに、その使徒の頭の如きを見たり。

第七章

かくて祭司長いへり、されば此等の訴かくの如くあるや否や。二乃ち彼等

けるは、人々兄弟及び父等よ、聞け、榮光の神は我等の父アブラムに、彼

のウランに住みし以前メソポタミアにありしとき、現はれ給ひ、三且つ彼に對ひて曰へり、い

ざ汝の土地より、また汝の親戚より出て、我が汝に見はさんとする地に來れ。四そのときカ

ルメヤ人の地より出て來りて、彼はカランに住あり。かくて彼の父の死にし後、そこより彼は

彼を今汝等の住むところの此の地に移し給へるなり。五また彼は彼處にては副業を彼に與へ給

はず、足ふみ立つる程をも與へ給はず、されど彼に所有としてこれを與ふことを約束し給へり、

即ち彼は子あざりしが、彼の後に彼の種に與ふことを約束し給へり。六また神はかく語

たり給へり、彼の種は他國人の地に強り入たらん、また(その國人)これを四百年の間奴僕と

なせ、且つ虐く扱ふべし。七また神曰へり、彼等が奴僕たらしめらるるその國人をわれ救く

へし。また此等の事の後彼等は用で来り、かくて此處にて我に服事すし。又また彼は彼に樹根の契約を興へ給へり。かくして彼はイサクを生めり、されば八月めにこれを割禮せり。かくてイサクはヤコブを、ヤコブは十二兆組等を生めり。又また先組等はヨセフを始めてエジプトに賣れり、されど神は彼と共におはしたり。一〇 されば彼の親の才てより彼を授け出だし給ひ、且つ彼にエジプトの王バロの前にて恵と智謀を興へ給へり。されば彼は彼を立ててエジプト並に彼の全家の者となせり。一 然るにエジプトの全地とカナンとに饑饉と大なる饑と到れり、されば我等の先組等は食料を具用ださざりき。二 されどヤコブはエジプトに穀物ありしことを聞きければ、先づ我等の先組等を使はせり。三 かくて再度のときに及び、ヨセフは其の兄弟等に知られ、またヨセフの族はバロに賜に成り。四 さればヨセフは人を使はして、その父とその親族七十人の魂をすべて召し寄せたり。五 乃ちヤコブはエジプトに下り掛けり。かくて彼と我等の先組等はは死ねり。六 又また彼等はシケムに移され、かくてエジプトにシケムに於て死せり。七 然るにエジプトの王バロの命に於て死せり。八 乃ちエジプトの王バロの命に於て死せり。九 此の者は我等の族を埃及に扱ひ、我等の先組等を瘞く持なし、その屍體を生きて居り。一〇 其の期に於てモザセは生まれ、また神の前に於て生れり。十一 彼は三ヶ月の間その父の家に居たり。

三 かくて彼は棄てられしがバロの姫これを取り上げ、己自らの子として養てたり。三 かくてモラセはエジプト人のすべての智慧をもて睡べられたり、されば言と行とに力ある者なりき。三 かくて彼は四十歳の時の満ちしとき、イスマエルの子等なる己が兄弟等を顧みることをも心の心に思ひ添たり。四 されば一人の侍はる者を見しとき、彼はかの抑へらる者を防ぎ置り、エジプト人を鞭ちて鞭を復せり。五 乃ち彼は、神がその手によりて彼等に救を興へ給ひつあることを、兄弟等は悟るならんと思ひたり。然るに彼等は悟らざりき。六 又また次の日に、彼は亦いつありし人々に現はれて平和を勸め、いひけるは、人々よ、汝等は兄弟なるに何のために互に拵ふや。七 然るにかの隣人を害ひつありし者、彼を押し退けていひけるは、誰が汝を立てて我等の畏、また抑人となしや。八 汝は昨日エジプト人を殺しし如くだ、われを殺さんと欲するにあらざるか。九 乃ちモラセは此の言にて、遁れてミヂヤンの地に寓り人となり、そこにて二子を生めり。一〇 かくて四十年の満ちしとき、シナイ山の荒野に於て彼に二人の使、柴の火の輝のうちに現はれたり。三 さればモラセは幻を感しみ見て、これを認むんとて近きしに、主の聲彼の音に來れり。三 我は汝の先祖等の神、アブラハムの神またイサクの神またヤコブの神なり。乃ちモラセは懼き、敢て認むることを得ずなれり。三 されど主は彼に曰へり、汝の足の鞋を解け、そは汝が立つ處は聖なる地なればなり。四 言われ見しに、我が民のエジプトにて燦々たるを見たり、且つその叫を聞けり、乃ちこ

れを授け出さんために降り来れり。さればいざ来れ、われ汝をエジプトにまで使はざん。至
 誰が汝を立てて、また仲人となせしや、といひて彼等が拒みしモラセ、此の者を神はまた
 ひ人となして、榮の中に現はれたる天使の手にて使はし給へり。至×此の者はエジプトにて、
 また紅海にて、また四十年の間荒野にて、奇跡と徴とを爲しつ彼等を連れ出だせり。至×此
 の者は、主、汝等の神が、汝等の兄弟等のうちより我が如き渡言者を遣し給ふべければ、汝等こ
 れより離れてし、とオスラエルの字等にいひしところのモラセなり。至×此の者はシナイ山に
 て彼に語たりし天使及び我等の先祖等と共に、荒野の低處に在りしところ、我等に與へんとて
 來ける言を授けしところの者なり。至×彼に我等の先祖等は眼ふことを欲せず、反つてこれを
 押し退けて、その心をエジプトに歸へし、且、プロンにいひけるは、我等に先立ち去れ、主、神
 を我等のために遣れ、そは我等をエジプトより連れ出だしモラセ、此の如は如何なる事の
 據に當りしかを我等知らざればなり。至×かくてそれらの日に、彼等は報を遣りて、祭司長に
 權柄を獻け、また巨が其の行を樂めり、至×されど神は彼等を離れ、且つ天の軍勢に與事する
 ために彼等を辱し給へり。これ渡言者等の器物に録さるが如し、オスラエルの家々、汝等は
 荒野にて四十年の間、臥りし地を離れ、曠野を我が長に獻げしや。至×また汝等は來りしために、
 汝等の地よりし物なるモロクの薪屑と汝等の神レバンの風とを携へたり、さればわれ汝等を彼
 方のバビロンに移すべし。至×モラセに語たり給ひし者の、彼が觀ししところの標に預ひて遣れ

と命じ給ひしままなる證の葉は、荒野にて我等の先祖等のうちに在りき。至×我等の先祖等
 はそれを承け繼ぎ、神が我等の先祖等の顔の前より語ひ出だし給ひし國人の「地を」領有する
 に際し、イエスと共に携へ入りて、ヌエテの日までに及べり。至×彼は神の面前にて道を待た
 れば、マコラの神のために、一つの葉を獲んことを求めたり。至×されどプロモンの彼のため
 に家を建てたり。至×然るに至りては手にて遣れる神殿に往み給はず、渡言者等の云ふが如
 し、主、汝が給ふ、我には天は位なり、また地は我が足の足袋なり。汝等如何なる家を我が
 ために建てんとするか、また我が休るところは何處なるや。至×我が手は此等のすべてを造ら
 ざりしか。至×頭にして心と耳とに刺さるべき者よ、汝等は常に聖なる家に遊ぶこと、汝等も
 汝等の先祖等の如し。至×汝等の先祖等は孰れの渡言者をか遣言せざりし、且つ彼等は義しき
 者の來り給ふことに就きて、潔め宜備へたるそれらの者を殺したりしが、今汝等はその「義し
 き者」の賢り人また殺し人となれり。至×汝等は天使の扱によりて捉え受けたり、されどこれ
 を悔ひざりき。
 至×然るに此等の事を聞きしとき、彼等は其の心慾に堪へ得ず、且つ彼に向ひて切齒せり。
 至×されど彼は言葉にて漸たされどありければ、天を觀望めつ、神の榮光と神の右手に立ち
 給ふイエスとを見たり。至×かくていへり、見え、我は聞きたる天と神の右手に立ち給ふ人の
 子とを看る。至×されば彼等は大聲にて叫びつ、その耳を掩ひ、且つ心を一にして彼に跳び

かかれり。又かくて市の外に顔を出して石でり。また聖人等はその上表をサウロと呼ぶ者
 の足下に駆けり。又即ち彼等は、主イエス、我が靈を受け給へ、と断り且つ云へる。又サ
 パノを行ちたり。又また彼は腰を胸め大聲にて叫べり、主よ、此の罪をば彼等に負はしめ給
 はされ。かくいひて彼は隠れり。

第八章

然るにサウロは彼の殺せしを聞とせり。かくてその日にエロホルムに在り
 し集會に對ひて大なる糾紛の發りたれば、使徒等のほかは、すべてエササ及び
 サウロの地方に散りされたり。ニされど敬虔なる人々エササノを排り、彼のために大なる患
 をなせり。又またサウロは聚會を罷らしつもありしが、家に宿ひて入り行き、別また婦を見
 出だして地背に宿せり。■此の故に散りされたる人々、到る處に朝堂^{モサ}を宣傳へたり。
 又またサウロはサウロの形に下りて、使徒にキリストを宣へたり。又されば彼が偽し敬
 を聞き、また觀て、諸齋衆を一にして、サウロの云へるとの方の事に心を注めたり。モそは
 纏れたる靈に對かれし多くの人々より、大聲に叫びつその靈出で去り、また多くの中風の者
 と雖の者も驚されたり。又さればかの市に大なる聲ありき。然るに入あり、その名は
 シモン、市に出でて自ら人たる者なりと云ひつ、魔術を用ひてサウロの兩人を驚かしつ
 ありき。この小より大に響るまでして、此の者は神の大なる力なり、と云ひつ彼に心を注
 ぬたり。ニされど彼等が彼に心を注めたるは、彼が久しき間魔術をもて彼等を驚かしたる

が故なり。三 然るに彼等は福音神の國またイエスキリストの名に就きての事を宜敷ふるに
 リガを信せしとき、男も婦もバプテスマをせられたり。三 またシモン自らも信じてバプテスマ
 せられ、餘念なくサウロともになりき。然るに彼と大なる力の現はるを看て驚かされた
 り。四 かくてエロホルムに於ける使徒等、サウロに於ける靈を受けしことを聞き、サウロ
 とヨハネとを彼等の許に使はせり。五 彼等は下り行き、彼等の聖靈を受くるやう彼等のた
 めに祈れり。六 彼は未だ彼等のうちの誰の上にも降り給はず、彼等は唯主イエスの名に入れ
 てバプテスマをせられたるのみなりしが故なり。七 其のとき彼等は彼等の上に手を置きたれ
 ば、すべての者聖靈を受けたり。八 然るにシモンは、使徒等の手を置くことによりて聖なる
 靈を興へられしを看て、彼は金子を彼等に提供して、九 云ひけるは、我が手を置くところの者
 の、聖靈を受くるやう此の權を我にも與へよ。三 然るにペテロ彼に對ひていへり、汝の銀子
 は汝と同じに^ばにびたらんことを、そは汝は神の賜物を金子によりて得んと思ひたればなり。三
 汝は此の言に分たなく、また與もなし、そは汝の心は神の面前に直ならざればなり。三 是の故
 に汝の此の惡より悔ひ改めよ、且つ前に祈願せよ、汝の心の念滅ひは汝に赦さることあるな
 らん。三 三 是はわれ汝の苦き^苦と、不義の難に在ることを目のあたり觀ればなり。三 四 乃ち
 シモン答へていへり、汝等の我に對する事の^一つも我が上に來らざるやう、汝等我がために主
 に祈せよ。

れど誰をも脅さざりければ、無害にて立ちたり。八かくてサクロは地より起きたり、またその目を開きたれど、何をも感ぜざりき。されば彼等はその手を引きつつダヌニコに連れ入れたり。九かくて彼は視す、また喰はず、また飲みもせざること三日なりき。

「またダヌニコはアナムニといふ或る弟子ありき、かくて如何のうちに主は彼に對ひて曰へり、アナムニよ、乃ち彼いへり、見よ、われ（旅處にあり）主よ、一主また彼に對ひて曰ひけるは、起ちて旅と呼ぶ街に往き、且つエヌの家に見ルンのサクロといふ者を求めよ、そは見よ、彼は断ればなり。二且つ彼はアナムニといふ人入り來り、且つ彼の視力を受けるために、その上に手を置くを見ればなり。三然るにアナムニ答へり、主よ、我は此の人に逢ふぞ。四且つ彼は此の處にて旅の名を呼ぶ者すべてを縛らんとて、祭司長等より心奪をもつなり。五主また彼に對ひて曰へり、往けよ、そは此の者は國人及び王等遂にオヌラヌの子等の前に、我が名を稱けしむるために、我にとりて選の器なればなり。六我は我が爲のために、彼がいかにばかり多くの苦を受けざるべからざるかを彼に示すべし。

七乃ちアナムニ出づてかの家に入り、且つ手を彼の手に按きていへり、兄弟サクロよ、主は我をばはし給へり（即ち）汝の來りし處にて汝に現はれ給へるオヌヌは、汝の視力を受けしつゝ運んで来たるために我をばはし給へり。八乃ち彼に縛の如きもの彼の目より出

ち、怒お視力を受け、且つ起ちてパナムニせられたり。また食物を攝りてカヅけり。一かくてサクロは數日の間、ダヌニコに在る弟子等のうちにおりき。二また彼は直に會堂にて、此の者は神の子におはすと、キリストを宣へたり。三さればこれを聞ける者すべて驚きて去へり、エルサレムにて此の名を召ぶ者を止ほし、且つこれがため、即ち彼等を縛りて祭司長等の許に連れ往くために、此處に來りしは此の者にあらずや。三然るにサクロはいよいよ加はり、且つ此の者はキリストには知すことを確めつつ、ダヌニコに住めるユダヤ人を論じ伏せたり。四かくて多くの目を癒しとき、ユダヤ人彼を殺さんと協謀せり。五されどその密計サクロに知られたり、即ち彼等は彼を殺すために、日も夜も門を護りつつありしなり。六然るに弟子等夜の間に彼を取りて監に入れ、石垣によりて下らしめたり。七かくてサクロはエルサレムに詣りて、弟子等に結び附かんと力めたれど、みな彼を懼れて、その弟子たることを悟せざりき。八然るにエルサレム彼を捉へて、使徒等の許に連れ往き、道にて主を見たることと、彼が彼に詣たり給ひしこと、及びダヌニコにてオヌヌの名に於て、應ずることなく歸りしこと、どの狀況とを彼等に具に陳べたり。九かくて彼はエルサレムにて彼等のうちに入り往き、且つ出で往きつつありき。一〇また彼は主オヌヌの名に於て應ずることなく歸れり、かくて彼はキリヤサの諸のユダヤ人と憎に話たり且つ論じ合へり、然るに彼等はこれを殺さんと企てたり。一一されど兄弟等これを覺かに知りしとき、彼等をサマリヤに連れ下り、かくてエルサレムに送る

たり。三是の故にエダヤ全園ガリヤ及びサウヤを通じて、衆會は如何にも平和を得て堅く立ち、主を畏れて進み、且つ聖靈の慰のうちに増したり。

三またペテロは通く四方を巡りて、ルツダに住める聖徒等の許に下り來れり。三そこにて彼はアイネアといふ者に、八年の間床に臥し居る人を見出だせり、彼は中風をわづらひつづありき。四乃ちペテロ彼にいへり、アイネアよ、イエス即ちキリスト汝を醫し給ふ、起ちて自ら床を「展べよ。乃ち彼は直に起てり。五さればルツダとサロンに住めるすべての人

人、彼を見て主に歸せり。

六またヨツバに姉の弟子ありき、その名はタビタ、譯してバルカヌと云はる、彼は善き行

とその爲せる施とにて滿ちたり。七それらの日にかくありき、彼は病みて死にたり、されば

人々瀕きて階上の室に置けり。八またルツダはヨツバに近ければ、弟子等ペテロの彼處に在

るを聞きて、二人の者「を便はして「彼に「厭はしとせず、彼等の許に列り來らんとを乞

へり。九さればペテロ起ちて彼等と共に往けり、彼の語りしとき彼等は階上の室に導き、

かくて衆等みな彼の傍に立ちて泣き、且つトルカヌが彼等と共に在りしとき、作れる下衣また

上衣を見はず。一〇然るにペテロすべての者を外に逐ひ出だし、際を閉めて祈れり。かくて體

の方によりかへりていへり、タビタ起きよ。乃ち彼は側眼を開きてペテロを見つ坐せり。一

また彼は手を興へて彼を起せり。かくて聖徒等及び衆等を召ひて、坐ける彼を差し出だせり。

第十章

二また此の事ヨツバのうちに通く知れ渡れり、されば主を僞する者多かりき。三かくて彼

は多くの日の間「穢しきものなる者と偕にヨツバに住むことなれり。

然るにカイガリヤにコルネリオといふ人ありき、イタリヤ降と呼はる隊の

百人長なり。三その家のすべてと共に奉じ、且つ神を畏れ、民に多くの

施を爲し、また恒に神に祈願せり。四彼は日の第九時頃、神の使彼の許に入り來りて、コルネ

リオと、といふを顯にのうちに見たり。五然るに彼は彼を認識めつ、且つ怖ろしくなりて

いへり、主よ、何なりや。乃ち彼いへり、汝の隣また汝の施、上りて神の面前にて懺ひ出でらる

るに至れり。六されば令人々をヨツバに遣はし、ペテロと稱へらるるシモンを迎へよ。六此の

者は「穢しきものなる者の許に住るなり、その家は海邊にあり。此の者は汝の必ず感ざるべ

からざることを汝に語たるべし。七さればコルネリオに語だりし天使の去りしとき、彼は二

人の「家候と、彼に憐念なく住らる者の中の一人の「崇しき兵卒を召ひて、八彼等にす

べての事を陳べて、みなこれをヨツバに使はせり。九かくて明る日、此等の者の旅してその

市に近づきし頃、ペテロ所らんとて屋の上に登れり。第六時頃なりき。一〇然るに彼は甚だ空

腹になりければ、嘆ふことを欲したり。乃ち人々の「響へつありしうちに、彼は氣を喪へる様

の心地になれり。一一かくて開きたる天と、大なる雲布の四隅を掲げて、地上に下げたる如き

器物の、彼の上に降るを看る。一二その中に地のすべての四足のもの、また野の獸、また鱧ふ

も、また空の鳥ありき。三また聖彼の許に来たり、ペトロと、起ちて親せ、且つ嘆へ。一曰然るにペトロいへり、主と、可からず。そはわれ未だすて普通の物、或ひは不淨なるものを、懐ひしことなればなり。二五かくて塵復た二たび彼の許に来れり、神の淨め給ひしものを、汝は普通のものとなす勿れ。二六かくて三たびかくありて、器物は復た天に擲られたり。一七さればペトロは己自らのうちに、彼が見たる如は何なるかと惑ひてありしとき、見よ、ユルリオより使はされたる人々、シモンの家を訪ふて、門口に立てり。一八かくて彼等は呼びて、ペトロと稱へらるるシモンはここに宿るや否やと尋ねたり。一九またペトロの如に就きて考へつつありしとき、靈彼に目へり、見よ、三人汝を祭む。三されば起ちて下れ、且つ祭はずして彼等と共に往け、そはわれ彼等を使はしたればなり。二乃ちペトロはカオサリヤより彼の許に使はされたる人々の許に下り往きていへり、見よ、我は汝等の祭むる者なり、汝等の來りしは何のためなるや。三乃ち彼等いへり、義しき且つ神を畏る人にて、ユダヤ人の國人の悉くより證せらるる、百人長ユルリオは、汝を彼の家に迎ふること、汝より詞を聞くことを聖なる使より語を蒙れり。三是の故に彼は彼等を呼び入れて宿らしめたり、かくて明る日、ペトロは彼等と共に出て來れり、またヨツパよりの兄弟等の數人彼と同行せり。二四かくて彼等は明る日カオサリヤに入り來りしに、ユルリオはその親戚及び親しき友等を前に對して、彼等を待ち受けつつありき。

三五またペトロの入り來りしとき、ユルリオは出て登りて、その足下に伏して拜せり。二六然るにペトロ彼を起して云ひけるは、起てよ、我も同じく人なり、モかくて彼は彼と語り合ひつ入り來りて、多くの者の集まれるを見出せり。二七乃ちペトロ彼等に述べるは、汝等はユダヤ人たる者に取りては、他の族の者と結びつき、或ひは近づくことは如何ばかり不法なることなるかを知る。されど神は何人も普通のもの、或ひは不淨なるものと云ふまじきことを我に見はし給へり。二八なるが故に迎へられたれば、躊躇せずして我は刑れり。是の故に尊ねん、如何なる言のため、汝等は我を迎へしや。三乃ちユルリオ述べるは、四日前この時刻に至るまでわれ隣食しつつありき。また第九時の頃我が家にて祈りつつありしに、見よ、人あり輝く衣服にて我が面前に立ちて、三進之けるは、ユルリオよ、汝の隣は聞かれ、また汝の施は神の面前にて憶ひ出でられたり。三是の故にヨツパに「人を」遣はし、且つペトロと稱へらるるシモンを召び寄せよ。此の者は海邊の線織シモンの家に宿るなり、彼は詣りて汝に話だるべし。三是の故に時を移さずわれは汝の許に遣はせり。されば汝詣りて良きことを爲せり、是の故に今我等はすて、神より汝に仰せらるるすての事を聞かんとて、現に神の面前に在り。

三六乃ちペトロを歸きていへり、われ眞に神は憐愍なる者におはしますと、三六すての國人のうちにて彼を畏れ、且つ義を行ふ者は彼に等れらるるを聽るなり。三七汝等は彼が、

イエスキリスト此の者はすべての者の主におはします。主によりて、福音（即ち）平和を宣傳へつ、イエスキリストの子等に使はし給ひしところの言を知る。まはれヨハネが宣へしところのバプテスマの後、ガリラヤより始まり、週々エジプトに及びし嗣なり。三「即ち神はサガレとりのイエスを、聖霊と力とをもて彼を油ぬり給ひし故に、彼は週々めぐりて善を行ひ、聖魔に抑へられたるすべての者を癒し給へり、それは神彼と共におはしたればなり。三九また我等は、彼がエジプトの地方にても、またエルサレムにても、爲し給ひしすべての事の證人なり。彼等は彼を木に懸けて殺したり。四〇神は此の者を三日目に起し且つ顯ならしめ給へり、四一すべて同に成りて同じに飲みしところの證人になりき。四二また彼は民に宣ふること、神によりて彼は立てられ給ひしところの生ける者と、死ねる者との裁き人なることを、^聖に證することとを我等に命じ給へり。四三すべての豫言者等は、彼を信する者はみなその名によりて罪の赦を受くることを、此の者のために證するなり。四四ペテロの尙ほ此等の詞を語たるとき、言を開けるすべての人々の上に聖なる靈降り給へり。四五かくてペテロに同行したる割禮の信者等は、すべて國人の上にも、聖靈の賜物を注がれたることに驚かされたりき。四六それは彼等は、言葉にて彼等が語たり、且つ神を崇むるを聞ききたればなり。そのときペテロ答へけるは、^主誰か水を禁じて、我等の如く聖なる靈を受けたる此等の者の、バプテスマせらるることなからしむることを得んや。四八乃ち主の名に於てバプテスマせらるることを指圖せり。そのとき彼等は數日運まらんとを彼に附へり。

第十一章

またエジプトに在りし使徒等及び兄弟等、國人も神の言を受けたことを開けり。三かくてペテロのエロソルムに上りしとき、割禮の人々は彼と争ひ論じて、三云ひけるは、汝は割禮なき人々の許に入り來り、且つ彼等と共に喰へり。四然るにペテロ次第をもて解き明し始めて云ひけるは、^マわれヨツパの市にて祈りつゝありしに、氣を擡ぐる様の心地のうち^に幻を見たり、大なる數布の四隅もて、天より下げたる如き器物の降り、且つ我に近づき來るなり。五われそれを觀察めつ思ひ見しに、地の四足のもの、また野の獸、また魚どもの、また空の鳥を見たり。七また我に云ひ給ふ聲を聞けり、^ペテロよ、起きて救へ、且つ喰へ。八されどわれいへり、主よ、可からず。そはずべて普通のもの、或ひは不淨なるものは、曾て我が口に入り來りしことなし。九然るに再び天よりの聲、我に答へ給ひけるは、神の淨め給へるものを汝は普通となす勿れ。一〇かくて三たびかくありて、復たすべて天に引き揚げられたり。二また見よ、時を移さず三人我が在りし家に立てり、カイザリヤより我が許に使はししなり。三また靈われに、疑はずして彼等と同行せよ、と曰へり。かくて此等六人の兄弟等もわれに伴ひ判りて、かの人の家に入り來りしに、三彼はその家にて、如何に天使の立ちつ、ヨツパに人々を便はしてペテロと稱へらるるシモンを迎へよ、と曰彼は、

は、急を起きよ、かくてその手の鍵は離れ落ちたり。人また天使彼に對ひて云へり、汝自ら鍵ひ且つ籠を結べ、乃ち彼はその如くせり。また彼云ふ、汝の上衣を覆ひて我に従へ。カ乃ち彼は彼に従ひて出で來れり、されど天使によりて感に發れることなるを知らず、されど如を慮たりと思へり。かくて彼等は第一第一の檻倉を経て、市徑を越へ、市徑越へるところの鐵門に到りしとき、門おのづから彼等のために開きたり、されば出で來りて一つの街に遁み往けり。然るに直に天使は彼より離れて去れり。一乃ちベテロわれに返りていへり、今われ眞に主はその使を送り給ひ、且つベテロの手よりまたエダヤの民のすべての待ち殿より、我を援ひ出だし給ひしことを知る。二かくて彼は思ひつゞルコと稱へらるるヨハネの垣なるマリアの家に到りしに、多くの者集まりて祈りつゞありき。

一三かくてベテロ門の戸を叩きしとき、婢その名はロウダ進み來り、聞きて、一曰ベテロの聲を認めたれば、喜の餘り門を開かずして走り入り、ベテロが門の前に立つことを報じたり。二五然るに彼等は彼に對ひていへり、汝は狂へり。されど彼はかくありと云ひ服りたれば、彼等は彼の天使なりと云へり。二六然るにベテロは明きつゞ居れり、されば彼等は開きて彼を見たり、乃ち驚かされたり。七されば彼は手振をなして歎きしめ、如何に主は糧倉より彼を遣は出だし給ひしかを具に陳べ、且つマコと兄弟等に此等の事を報せよといへり。かくて出で奉りて他の處に往けり。八、然るに彼等は去りしを、さればベテロは如何になりしやと、兵卒

等のうちの顯小ならざりき。一九またベテロは彼を索めたれど見出ださざりければ、衛り人等を謂て、死罪に處せらるることを命じたり。かくて彼はエダヤと下りガリラヤに到りて留まれり。二〇またベテロ牙はツロ人とシドニア人を甚く悲れり。されば彼等は心を一にして彼の許に到り、王の内侍の臣ツラストに懇を得て平和を求めたり。そは彼等の國は王の國より食料を供給せられたるが故なり。

二一かくて定めたる日に、ベテロは王の衣服を齊、且つ裁き座に坐し、彼等に對ひて演げり。二三されば公衆、神の塵にして人の「塵」にあらず、と叫べり。二三然るに主の使認ち彼を察てり、是れ彼は榮光を神に歸し奉らざりし故なり、乃ち彼は處に食まれて息絶えたり。二四かくて神の言は長じ且つ増せり。三またベテロとサウロは奉命を遂げ、かくてマコと稱へらるるヨハネを携へてエルサレムより歸りたり。

第十三章

またツテオクの集會に數人の擧言者と教師とありき、バルナバ及びニゲルと稱へらるるスマクオン、またクレホ人なるルキオ、また分封の主ベテロの判官サウロ、并にサウロなり。二また彼等は主に住へ、且つ斷食しつゞありしとき、聖なる靈曰へり、バルナバとサウロとを我が、彼等を召したる行のため、我に別かてよ。三そのとき彼等は斷食したる所より、且つ彼等の上に手を敷きて、去らしめたり。四是の故に此等の者は聖なる靈より遣はされて、セルギヤに下り行き、また彼處よりクプロに航り往けり。五かく

て彼等はオアシスに現はれ、オアシスの尊嚴に神の言を宣べしが、¹「オアシスを使として携へり。六また馬を連れて遠路に來りしとき、彼等はオアシスの傍の強音者なる或る魔術師を見出だせり。その名はオアシスにありき。七彼は強音者なる代官オアシスに國にありき。此の強ルオアシスをオアシスと召して、神の言を聞かんとを棄めたり。八然るに魔術師なるエルムスニ其の名はかく隠せらるればなり。九彼等に逃らひ、代官を信仰より曲げんことを棄めたり。かされどオアシス即ちオアシス、聖靈にて満たされ、彼を認めていへり、一〇ああ、すべての國、またすべての邪にて滿てる者、惡魔の子、すべての義の敵よ、汝は主の直き道を曲げて止めざるか。二されば今見よ、主の手汝の上にあり、汝は實となりて響く響を聞ざるべし。乃ち怒り響を響と彼の上に降ちたれば、歩み廻りて手引する者を棄めたり。三二そのとき代官は疲りし響を見よ、主の教に獲かされて償せり。

三かくてオアシス及び伴人々、オアシスより船出してオアシスに到れり。然るにヨハンは彼等より離れてエロソルムに歸れり。一四されど彼等はベルグを過りてヒンヂヤのアンチオケに詣り、かくて安息日に會堂に入り來りて坐せり。一五然るに控及び強音者等の響の朗讀ありて彼は、會堂長等の人を彼等に使はして云ひけるは、人々兄弟等よ、もし汝等のうちに民に對ひて美の音あれば云へ。六乃ちオアシスは起ち且つ手振をなしつついへり、人々オアシスに對ひて美の音を奏せらるる者、八聞者神の聲を奏せらるる者、九聞者神の聲を奏せらるる者、十大衆の神を畏るる者、十一聞者神の聲を奏せらるる者、十二聞者神の聲を奏せらるる者、十三聞者神の聲を奏せらるる者、十四聞者神の聲を奏せらるる者、十五聞者神の聲を奏せらるる者、十六聞者神の聲を奏せらるる者、十七聞者神の聲を奏せらるる者、十八聞者神の聲を奏せらるる者、十九聞者神の聲を奏せらるる者、二十聞者神の聲を奏せらるる者、二十一聞者神の聲を奏せらるる者、二十二聞者神の聲を奏せらるる者、二十三聞者神の聲を奏せらるる者、二十四聞者神の聲を奏せらるる者、二十五聞者神の聲を奏せらるる者、二十六聞者神の聲を奏せらるる者、二十七聞者神の聲を奏せらるる者、二十八聞者神の聲を奏せらるる者、二十九聞者神の聲を奏せらるる者、三十聞者神の聲を奏せらるる者、三十一聞者神の聲を奏せらるる者、三十二聞者神の聲を奏せらるる者、三十三聞者神の聲を奏せらるる者、三十四聞者神の聲を奏せらるる者、三十五聞者神の聲を奏せらるる者、三十六聞者神の聲を奏せらるる者、三十七聞者神の聲を奏せらるる者、三十八聞者神の聲を奏せらるる者、三十九聞者神の聲を奏せらるる者、四十聞者神の聲を奏せらるる者、四十一聞者神の聲を奏せらるる者、四十二聞者神の聲を奏せらるる者、四十三聞者神の聲を奏せらるる者、四十四聞者神の聲を奏せらるる者、四十五聞者神の聲を奏せらるる者、四十六聞者神の聲を奏せらるる者、四十七聞者神の聲を奏せらるる者、四十八聞者神の聲を奏せらるる者、四十九聞者神の聲を奏せらるる者、五十聞者神の聲を奏せらるる者、五十一聞者神の聲を奏せらるる者、五十二聞者神の聲を奏せらるる者、五十三聞者神の聲を奏せらるる者、五十四聞者神の聲を奏せらるる者、五十五聞者神の聲を奏せらるる者、五十六聞者神の聲を奏せらるる者、五十七聞者神の聲を奏せらるる者、五十八聞者神の聲を奏せらるる者、五十九聞者神の聲を奏せらるる者、六十聞者神の聲を奏せらるる者、六十一聞者神の聲を奏せらるる者、六十二聞者神の聲を奏せらるる者、六十三聞者神の聲を奏せらるる者、六十四聞者神の聲を奏せらるる者、六十五聞者神の聲を奏せらるる者、六十六聞者神の聲を奏せらるる者、六十七聞者神の聲を奏せらるる者、六十八聞者神の聲を奏せらるる者、六十九聞者神の聲を奏せらるる者、七十聞者神の聲を奏せらるる者、七十一聞者神の聲を奏せらるる者、七十二聞者神の聲を奏せらるる者、七十三聞者神の聲を奏せらるる者、七十四聞者神の聲を奏せらるる者、七十五聞者神の聲を奏せらるる者、七十六聞者神の聲を奏せらるる者、七十七聞者神の聲を奏せらるる者、七十八聞者神の聲を奏せらるる者、七十九聞者神の聲を奏せらるる者、八十聞者神の聲を奏せらるる者、八十一聞者神の聲を奏せらるる者、八十二聞者神の聲を奏せらるる者、八十三聞者神の聲を奏せらるる者、八十四聞者神の聲を奏せらるる者、八十五聞者神の聲を奏せらるる者、八十六聞者神の聲を奏せらるる者、八十七聞者神の聲を奏せらるる者、八十八聞者神の聲を奏せらるる者、八十九聞者神の聲を奏せらるる者、九十聞者神の聲を奏せらるる者、九十一聞者神の聲を奏せらるる者、九十二聞者神の聲を奏せらるる者、九十三聞者神の聲を奏せらるる者、九十四聞者神の聲を奏せらるる者、九十五聞者神の聲を奏せらるる者、九十六聞者神の聲を奏せらるる者、九十七聞者神の聲を奏せらるる者、九十八聞者神の聲を奏せらるる者、九十九聞者神の聲を奏せらるる者、一百聞者神の聲を奏せらるる者、

またエゾプトの地に於ける魔のうちに於て此の民を興し給ひ、且つ高き廟もて彼處より彼處を連れ出だし給へり。二かくて彼は凡そ四十年の間、荒野にて彼等の所業を忍び、三またカナンの地にて七つの國人を亡し、その地を彼等に嗣業として頒ち給へり。四また此等の事の後凡そ四百五十年、強音者オアシスまで土師を興へ給へり。五またその後彼等王を求めたり。六されば神は四十年の間、彼等にニナミンの族の人なるキスの子サロを興へ給へり。七かくて彼を移してオアシスを彼等のために主として起し給ひ、彼のために聲をなして曰へり、われエツパイの子に我が心に稱ふ人なるオアシスを見出だせり、彼は我が意のすべてを爲さん。八神は約束に稱ひて此の者の種と、オアシスのために救主オアシスを起し給へり。九而その類の入り來り給ふ前に、ヨハンは先づオアシスエルの子への民に悔ひ改のオアシスを宣べたり。一〇かくてヨハンはその行程を漸たしつつありしとき云へり、汝等は我を誰たりと思ふや、我は彼にあらざり、されど見よ、彼は我に後れて來り給ふ、我は彼の足の鞋を擲くにも値せざるなり。一一人々兄弟、アラハムの族の子等、また汝等のうちの神を畏る人々よ、汝等のために此の救の言は使はざれたり。二是はエルサレムに住む人々及び其等は彼を知らず、また安息日に宿ひて讀まるる強音者等の聲をも知らずして、彼を讀きて成し就けられはなり。三また一つも死罪の理由を見出ださざるに、彼等はこれを殺さんことをヒラトに求めたり。四かくて彼等は彼に就きて録されたるすべての事を完く成せるとき、木より取り取りして森に墮けり。五

第十四章 聖徒等の行爲

然るに神は死人のうちより彼を起し給へり。三 彼は多くの目の間、彼と共にガリヤとエ
ルサレムに上りし人々に現はれ給へり、その人々は民に對ひて彼の證人なり。三 乃ち我等は
汝等に福音を傳へ、その先祖等に爲し給ひし約束を宣傳ふ、そは神はイエスを甦らしめ給ひて、彼
等の見たる我等にこれを成し就け給ひたればなり。三 詩の第二篇のうちに、汝は我が
子なり、われ今汝を生めり、と稱されたるが如し。三 又、彼は死人のうちより彼を起して、
再び廢朽に歸せしめ給はざることをか、顯ひ給へり、われ價なるダビデの聖きものを汝等に與
ふべし。三 又、かゝるが故に他の篇のうちにも、汝は汝の聖者に廢朽を見せしめ給はざること
と彼は云ふなり。三 又、ダビデは己が代のために、神の旨に従役して眠につき、かくて先祖
等に加へられ、且つ廢朽を見なければなり。三 然るに神の起したるは、廢朽を見ざり
しなり。三 是の故に人々兄弟よ、此の卷によりて罪の赦は汝等に宣傳せらるることを汝等に
知らしめらる。三 且つモラゼの掟にて、汝等が義とせらるること能はざりしすてのことよ
り、すべて信する者は、此の者在りて義とせらるなり。三 是の故に豫言者等（の書）の
うちに稱はれたること、汝等の上に来らざるや。三 視よ、一 且つ、汝等侮る者よ、驚け、且
つ消え失せよ、そは汝等の目にわれ一つの行を、即ち人これを汝等に具に顯ふとも、必ず汝
等の信せざらんとする行を行へばなり。

三 かくて會堂したるとき多くのユダヤ人及び信心深き改宗者等、パ
ルナバとに従ひたれば、彼等は語たりて、恒に神の理のうちをその人々に勸
めたり。

四 又、また次の安息日に市始んとするに、神の言を聞かんとて集まれり。三 然るにユダヤ
人辯論を見しとき、妬をもて滿たされたり、されば云ひ違はひつゝまた冒しつゝ、パ
ロに上りて云はれたる事に云ひ違へり。三 然るにパロとパルナバとは應ずることなく語りて
いへり、汝等には先づ神の言を語らざるを得ざりき。されど汝等はこれを押し退け、且つ已
自ら衰きて永の生に値せずとなすが故に、見よ、我等は國人に轉せん。三 又、そはかく主は我等
に命じ給ひたればなり、われ國人の光として汝を立てたり、これ汝を地の極にまで救はらしめ
んがためなり。三 又、されば（これを）開きて國人は喜び、且つ主の言を頌め、また永の生に定
められたる者はみな信じたり。三 又、かくて主の言は遍く此の地方に傳はれたり。三 然るにユ
ダヤ人は市の信心深き婦等、また童き婦等、また童立ちたる人々を激せしめ、且つパロと
パルナバとに對ひて追害を擧り立てて、彼等の塊より彼等を擧み出したり。三 一 されば彼等
はこれに對ひ足の塵を振り拂ひて、イコニオムに到れり。三 乃ち弟子等は喜と聖靈にて滿
たされたり。

第十三章 聖徒等の行爲

エヂヤ人もキリヤ人も、夥しき大衆の信するに至れる程、^{聖徒}たれり。二然るに願はざるエヂヤ人、兄弟等に逐ひて國人の魂を騙り立て、且つこれを「悪く思はしめたり。三是の故に彼等は主に在りて睡ることなく、^群群りつ多々の時留まれり、また主は彼等の手により微も奇跡とを爲さしめ給ひて、その邊の首に證をなし給へり、^{然るに}市の大衆二つに分れて、或る者はエヂヤ人に興し、或る者は聖徒等に興したり。五かくて彼等を辱しめ且つ行たんとて、國人及びその其等を作へるエヂヤ人の襲撃の被りしとき、^六彼等は屈りて、ルカオニヤの市たるルマテラ、またテラ、またその隣の地方に逃れ去れり。七かくて彼處にて福音を宣傳したり。八またルマテラに足に力を失へる或る者^{ありて}坐せり、母の語より脚に二付し歩きたることをなし。九此の者^{ルマテラ}の口を閉ぢたるを聞きけるに、彼はこれを亂讀めつ、かくてその聲を聞きし。一〇されば諸群衆^{ルマテラ}が爲ししことを見しとき、聲を揚げ、ルカオニヤ語にて云ひけるは、神々^も人の似くになりて我等の許に降り給ふ。二乃ち彼等はルマテラをセラム、またパウロは言の主なりしが故にルマテラと稱べたり。三かくて彼等の市の前に在りたるセラムの祭司は、諸群衆と共に、^數數の牛また數個の花掃を門の前に携へ來りて、^減減物にせんと欲せり。四されば使徒^{ルマテラ}及びパウロ、これを聞きて上衣を裂き、群衆のうちに跳び入り、^五叫び且つ云ひけるは、人々よ、汝等は何故に此の如き事を爲すや。我等も汝等と同じ

船の人々にて、^{福音}福音の空しきことより「離れ、^{天と地と海と}その中のすべての物を逆り給へ、^{生ける}生ける神に歸らんことを汝等に宣傳ふるなり。一六彼は過ぎにし代にはすべての國人の、その道々に往くことを惡び給へり、^七「されど天より雨と霧なる^霧の賜を與へ給ひて、食物と水をもて我等の心に満たし給ひつ、^汝汝を爲しては自ら認することなくして然しおし給ひしことなし。一八かくて彼等は此等の事を云ひて、漸く諸群衆を止め、彼等に欲げ物せんとするより「免れたり」。

一九然るにエヂヤ人、^{アソチア}アソチアとイコニオムとより彼方に到れり、かくて諸群衆を説き伏せ、且つパウロを看だしめ、^既既に死にたりと思ひて、市の外に曳き出だせり。二〇されば弟子等は立ちあがりてありしに、^起起き上りて彼は市に入りたり。かくて明くる日に由て、パウロは同にテラに到れり。二かくて彼等はその市に福音を宣傳へて、多くの者を弟子とし、ルマテラまたイコニオムまたアソチアに歸り、^三弟子等の魂を堅うし、恒に信仰に在ること、必ず多くの^群群衆を纏て我等は神の國に入らざるべからざることを勧めたり。三三また彼等は集會に預ひて彼等のために長老を撰ぎし、^既既にして斷り、^彼彼等が信せしところの主を彼等を察せまつれり。三四かくて彼等は^{シテ}シテヤを過りてアソチアに到り、三五またルマテラにて首を語つてアソチアに下り來れり。三六かくてそよより彼等が成し給へし行のため、會て神の恩に獲られたる處なるアソチアに就り給へり。三七また彼等は歸りしとき、^銀銀貨を賣め、

神が彼等と共に爲し給ひしすべてのこと、國人のために信仰の戸を開き給ひしことを知らしめたり。かくて彼等は弟子等と共に少なからざる時、彼處に留まれり。

第十五章

また或る人々エズナより下り来りて、モラの例に循ひて割れしるにおもひ給へり。汝等は教はること能はず、と兄弟等を教へたりき。是の故にエズナと彼等のうち他の數人、此の國に就きて、使徒等及び長老等の許にエズナの上り往てく定めたり。是の故に彼等は異會より遣はされて、エズナまたサベリヤを離りて、國人の敬宗を共に隨て兄弟等を共に養はしめたり。かくてエズナに歸りしとき、彼等は福音及び使徒等並に長老等に歡び迎へられたり、かくて神が彼等と共に爲し給ひしすべてのことを知らしめたり。然るに信したるペリサナ宗のうち多數人起りて、必ず彼等に相討し、またモラの彼を誣ることを命ぜり。かくてエズナより、かくて多く論

マされば使徒等及び長老等は、此の言に據きて其公のために相謀まれり。かくて多く論ありしとき、ペリサナ宗のうち復等に対していへり、人々兄弟と、汝等は風き目より、神は我が口によりて福音の言を國人の間に傳するために、汝等のうちより我を遣ひ給ひしことを知り、人また「人の心を知り給ふ神は、衆等にも「興へ給ひし」如く、我なる靈を彼等に興へ給ひて置をなし給へり。我も我等と彼等との間に差別を遣き給はず、信仰によりて彼等の心

を辨め給へり。是の故に今汝等は何故に我等の先祖等もまた我等も、負ふこと能はざりしことを我等ははするその如く、彼等も然るなり。ニまた大衆が歡してバルサバとバクが彼等によりて國人のうちに神の爲し給ひし禮と答謝とを陳ぶるを聞けり。ニかくて彼等の稱等の言これと合へり、練して、ニ此等の事の後、われ歸りて倒れしエズナの屍骸を得ば建つてし、またその軀をわれ再び造つて、またこれを興すべし。ニこれ等の人々、また我が名をもて稱へらるすべての國人の、主を崇め出ださんためなり。此等のすべての事を爲し給ふ主は、あるが如し。ニ即ち古より彼の行はずて、神に知らるるなり。ニ一かかるが故にわれこれを殿くに、國人のうちより神に聽する者を煩はずべきにあり。ニされど例それは古代よりモラでは何れの市にても、安息日に循ひて會堂にて讀まれたつ、彼を宣ぶる者を嫌と、淫行と、絞め殺したるものと、血との穢より遠ざかるべきことを彼等に遺き賜らん。ニそれは古代よりモラでは何れの市にても、安息日に循ひて會堂にて讀まれたつ、彼を宣ぶる者を有すればなり。

三 そのとき使徒等及び長老等は全衆會と共にこれを可としたれば、バカロ及びバルサバと共にアソナクに遣はさんとて、兄弟等のうちよりその靈立ちたる人々なる、バルサバと稱へ

らるるエダとシラスとの二人を選び、三 彼等の手によりにてかく書き贈られたり、彼等及び長老等並に兄弟等、アソナケ、またシラヤ、またキリキナに在る國人の兄弟等のために、平安を祈る。四 我等の何をも言ひ合めしとき、我等のうちのある人々出で来りて、甘きもて汝等を養ひ、刺しつけられたる汝を渡さるべからずと云ひつ、汝等の魂を苦しむと聞きければ、五 我等は一つ心になりて人を選び、我等の心主キリストの名のため、その魂を救へたる人々なる、六 我等の愛せらるるエルナバ及びバコロと同一に、七 汝等の許に遣はすを可とせり。八 是の故に我等はエダとシラスとを便はしたれば、彼等も我等をも同じき事を汝等に報せんとす。九 是は此等の肝要なる事の外は、如何なる尚をも汝等に負はしめざるを、理窟にもまた我等にも可とせられたればなり。一〇 即ち關係に推したる物より、また血より、また授め殺したるものより、また預行より遠ざかることなり、一 汝らより(遠ざかりて)汝等自らを渡せば、行ふこと分宜し、汝等健なれ。

二 是の故に彼等は送られてアソナケに到れり、かくて大家を便めに當取を承渡しせり。

三 乃ち彼等はこれを讀みしとき、その愛のために喜べり。四 またエダとシラスも心おのれ言ふれば、多くの言をもて兄弟等を勧め、且つ彼等を辱らせり。五 かくて久しくなれば、彼等は不和のうちには兄弟等より使徒等の許に送られたり。六 且つこれとシラスは彼が留まることを可とせり。七 またバコロとエルナバはアソナケに留まりて歎へ、且つ他の多くの人

人と共に福音の旨を宣傳したり。

八 然るに或る日の後、バコロはエルナバに對ひていへり、いざ我等立ち歸りて、主の言を宣傳したる市々に在る兄弟等の、如何なるかを願ひん。九 かくてエルナバはシラスと呼ぶるヨハネを作はんことを望めり。一〇 然るにバコロはバソフリヤより彼等を離れ、且つ行のたために同行せざりしことある、此の者を伴ふは宜しからずと思へり。一 是の故に彼等は互に別れり、相別れて出で立つに至れり、かくてエルナバはシラスを携へ、出でテラゴに航れり。二 されどバコロはシラスを選び、兄弟等より神の靈に委ねられて出で来れり。三 かくて詔

第十六章

子あり、その名は子モテ、價なるエダと婦人の子にて、父はキリシヤ人なり。二 彼はルナヤ及びイニコムにある兄弟等より選せられき。三 此の者をバコロは仲ひて出で来んと欲したり、されば取りて、彼處にありしユダヤ人のゆへに彼を割禮せり。四 彼は等はすべて、彼の父はキリシヤ人なることを知りたればなり。五 かくて彼等は市々を廻ゆきしとき、エルサレムにある使徒等及び長老等によりて定められたる令を、彼等に授けて書らしめたり。六 是の故に諸衆等は信仰に堅うせられ、また日に預ひてその數を増せり。

七 かくてアソナケ及びガラサの地方を廻りしとき、アソナケにて書を讀むることを衆衆に樂

せられたれば、セムシヤに下り来りて、彼等はヒテニヤに下り往かんと試みたり、されど衆彼等を許し給はざりき。入まればムシヤを纏て、彼等はトロアスに下り来り。かくて夕、夜の間にパウロに現はれたり、或る一人のウクトニヤ人あり、立ちて彼に乞ふて云ひけるは、ウクトニヤに渡りて我等を助けよ。されば彼が幻を見しとき、直に我等はウクトニヤに出で来らんことを案めたり。そは主は彼等に福音を宣傳ふるために、我等を召し給ひしなりと思ひ定めたればなり。二是の故に我等はトロアスより船出して、原直に走せてサモトラケに、また次の日本テポリスに、三かくて彼處よりピリヒに到れり。此處はウクトニヤの、その地方の第一の市にて殖民地なり。

また我等は此の町に數日留まりぬ。三かくて安息日に、市の外なる河に沿ひたる、隣のおらんと想はれし場所に出で来りて坐し、集まり來れる婦等に語たれり。四かくて一人の婦「あり、その名はルチヤとて、テアラの市の紫布の商人にて、神を崇むる者聞き居れり。主その心を聞き給ひて、パウロより語られたる事に心を注めしめ給へり。五また彼とその家のパウラスをせられしとき、彼は乞ふて、汝等もし裁きて我を主に對して信なる者なりとせば、我が家に来りて逗留せよ」と云ひて我等を強ひたり。六また我等が辭のために往きつゝありしときかくありき、ピトリの靈に憑かれたる一人の婢ありて我等に往き逢へり、彼は占にてその主人等に多くの利を得しめたる者なり。七彼はパウロと我等に匿き來りて、叫び云ひ

けるは、此の人々は至高き神の奴隷にて、汝の運を我等に宣傳ふる者なり。八また彼は多くの日の間かく爲したり、さればパウロは惱まされ、乃ち振り返りて靈にいへり、われイエスキリストの名に於て汝に命ず、彼より出で來れ。乃ちその時彼より出で來れり。九然るにかの主人等、彼等を利する望の去れるを見て、パウロとシラスを捉へて、長等の前にと市場に曳き入れたり。十かくて彼等を司等の前に連れ往きていへり、此の人々は我等の市を甚だしく擾せるユダヤ人にて、三ロヤ人たる者の受くることも、また爲すことも難しとせざる例を、我等に宣傳ふるなり。三かくて群衆は彼等に逆らひて罪り立てり、されば司等は彼等の上衣を纏り取り、命じて楯にて打たしめたり。三また多く彼等を管轄たる後提督に投じ、獄守に命じて楯に彼等を纏らしむ。四彼は此の如き命を受けたれば、彼等を眞の提督に投じ、且つその足を木にまで括れり。五かくて夜半の頃、パウロとシラス祈りて神を讃め歌ひければ、囚人等かれらに耳を傾けたり。六然るに俄に大なる地震發れり、されば獄屋の礎石も動かし、かくて窓の戸は開き、またすべての者の纏縛けたり。七されば獄守眠り覺め、且つ楯の戸の閉きたるを見しとき、囚人は逃げたりと思ひて、將に劍を抜きて自殺せんとせり。八然るにパウロ大聲に呼ばはりて云ひけるは、汝自身に對して惡しきを行ふ勿れ、そは我等すべてに依せり。九かくて彼等を外に連れ出だし、述べけるは、主等よ、我亦救はるために何を

爲さるべかりき。三 彼等乃ちいへり、主イエスキリストを信ぜよ、されば汝も家族も救はるべし。三 かくて彼等は彼とその家に在るすべての者と、主の言を語られたり。三 乃ちその夜の時彼は彼等を取りてその館を離れ、かくて起ち彼及び彼のすべての者バプテスマを授けたり。四 また彼等を彼の家に導きて食事を供へ、且つ各家族とともに神を信じて歎けられたり。五 かくて日になりしとき、刑等は同心等を徒はして哀ひけるは、かの人々を去らしめし。六 されば獄守は此等の言をバプテスマに報じたり、刑等は汝等の去らしめらるべし人を、徒はしたり、是の故に今出で來りて平和に往くべしと。七 然るにバプテスマに對して述べるは、罪に定めざる、ローマたる我等を、公に打ちて監倉に投じ、且つ今暫に投げ出さんとするか。宜しかば。されど彼等自ら來りて我等を連れ出だすべし。八 乃ち同心等これらの詞を刑等に報ぜり。されば彼等は彼等のローマなることを聞きて懼れたり。九 乃ち來りて彼等に乞ひ、且つ連れ出だして一保(市の外に出でんことを請へり。一〇 されば彼等は監倉より出で來りてルシアの許に入れり、かくて兄弟等を見て驚めし後、出で來りたり。

かくて彼等はアンティウリス及びアウロメナを旅して過ぎ、チカロメナに到れり、その處にエグサ人の會衆ありき。二 さればパウロの言に循ひて、彼等の許に彼は入り居たり。かくて三つの安息日に連日あり、彼等と談じ、エキリストは必ず道を授け給ひ、また死人のうちより起ち給はざるべからざりしこと、此の者は汝等に其傳ふるキリストイエスなりしことを聞き、且つ懼きたり。四 かくて彼等のうちの人々、また信心深きキリスト人の感しき火熱、また少なからぬ敢立ちたる婦等も説き成せられて、パウロとシラスに加はれり。五 然るに顯はざるエグサ人漸ましくなりて、市場の憤き者のうちの惡る漢どもを拘き込み、且つ群衆を集めて市を擾し、かくてキソンの家を毀つて、公衆の前に彼等を連れ往かんぞ求めたり。六 されど且出ださざりければ、彼等はキソんと數人の兄弟等とを、市長の所に曳きて、叫びけるは、世界を救したる者、此等の者は此處にも來れり、キソンは彼等を納れたり。且つ此等の者はすべてカイザルの命に背きて、イエスといふ他の王ありと云ふと。八 されば此等のことを聞きたる群衆と市擾等とを憤怒せしめたり。九 かくて彼等はキソン及びその餘の者より保衛を取りて、これを去らしめたり。一〇 然るに兄弟等は前に彼に乘じて、パウロをもシラスをもベシヤに送りければ、彼等は詣りてエグサ人の會衆に往けり。二 また此等の者はチカロメナに在る人々より哀き聲なりしかば、あらゆる別なる聲をもて言を受け、此等の事かくありしや否やと、日に循ひて群衆を興へたり。三 是の故に彼等のうちの多くの者は憤じたり。またキソンの人の實き明また婦も少なからざりき。三 然るにチカロメナのグナ人は、ベシヤにもパウロより神の言は宣傳せられたることを知りて、彼等は彼處に來りて聲を擧り立てたり。四 さればそのとき直に兄弟等はパウロを送りて遂に海に往かしめり。五 かくてシラスとテモテの二人は彼處に残りたり。五 然るにパウロを導きたる人々は彼を

アダムに連れ往けり。かくて彼等はシラスとチモテに、疾く疾く彼の許に到るべし、との命を受け取りて出で立てり。

一六 かくてパウロはアダムにて彼等を持ちしとき、偶像にて滿てる山を看て、彼のうちなる靈を憤らしめたり。一七 是の故に彼は會衆に於てはエタナ人及び心疾き人々、また市井に於ては日々過ふほどの人々と説き。一八 然るにエビク羅斯派及びストイック派の折衷者うちの人々、彼を論じおほひにそのうちある者は、此の立つ所何を云はんと欲するか、と云ひ、またある者は、他國の神々を宣傳ふ者なりと見ゆ、と云へり。是は彼は福音を云ふとき、^四 聖とを彼等に宣傳したればなり。九 かくて彼等は彼を捉へてアトバニスに連れ往き、云ひけるは、汝より来たる此の新しき教は何なるものなるか、我等知るを得べきや。一〇 彼は汝は汝の形りし事を我等の耳に入るはばなり。是の故に我等は此等の事の何の意なるや、知らんと思ふなり。一一 即ちすべてのアトバニス人及び各州の衆人は畏懼し、勇を去り、また聞かんとするもの外に、時を用ふることなかりしなり。

一二 かくてパウロはアトバニスの市中に立ちて、遂にけるは、人々アトバニス人、われ汝等の幾く神々を敬ふを看る。一三 是は愚を往くとき、汝等の崇むる物を看し、知らざる神に、と稱されたる一つの祭壇を見出だしたればなり。是の故に汝等の知らずして敬ふところのものを、われ汝等に宣傳せん。一四 是れ字面とすのうちのすべての物を造り給へる神、此の者

は、天と地との主にはせば、手にて運れる聖所に住み給はず。一五 また自らすべてに先を願ふとすべしものをも與へ給へば、何物をか獲する者の如くに、人の手にて造られ給はず。一六 且一つの血より人のすべての國人を川にして、地の淵のすべての上に住ましめ、衆がその住むところの期と歳とを限り給へり。一七 是れを奉めて、或はは彼等の彼に擲るため、また彼を肩出さんためなりしなり。されど神は我等おの知のを離るること遠くおはさず。一八 是は我等は彼のうちに生き、また動き、また在ればなり。汝等の詩人等のうちにも、是は我等も彼の稱なればなり、と謂ひたる者があるが如し。一九 是の故に我等は神の稱なれば、命まははば、または右に「作せる」人の技術また想像の形り物を、神性ある者と等しく考へべきなり。二〇 是の故に彼は無知の時代をば見過ぐしにし給ひしが、今はすべて何處の人にも悔ひ改むることをも命じ給ふなり。二一 如何となれば、彼はその立て給ひし人に在りて、義をもて將に世界を救ふんとする目を定め給ひ、死人のうちより彼を起し給ひて、すべての衆に俯仰せしめ給ひたるが故なり。二三 然るに死人の聲を聞き、或る者は嘲笑ひ、また或る者は此の亦に就きて、我等再び汝に聞かんといへり。二四 さればかくの如くして、パウロは彼等のうちより出で來れり。二五 されど彼の人々は彼に結びつきて信ぜり。そのうちにアトバニスの衆き人アトバニス人、また一人の婦その名はクリス、また他に彼等と共に衆人ありたり。

第十八章 かくて此等の衆の後、パウロは直進きてアテネよりコリントに判り、二

るエグザ人その名はアキラ、その出生はホント、またその妻はアリスキラとて、クワラチオがすべてのエグザ人にロウより先選んで命ぜしによりて、近頃イカリヤより来りし者を見出だして、その人たちの許に往きて、三國樂なる心ゆへに、彼等と偕に居りて働けり。そは彼等の業は大業難なりければなり。もまた彼は安息日に循ひて會衆にて談じ、かくてエグザ人及びガキリシヤ人を説き伏せたり。またシラスとチモガの下りてマクドニヤに到りしとき、パウロは羅に於て迎られて、オスはキリストに知はずことをエグザ人に羅に證しつゝありき。然るに彼等は抵牾し且つ辯じ、彼は上衣を振り掲げ、彼等に對ひていへり、汝等の血は汝等の頭の上にてあれ、我は淨し。今より國人の許に往かん。しかくて彼はその處より移りて、神を崇拜する者、その名はエヌトなる者の家に到れり。その家は會衆に續きて在りき。されど會衆の長老リヌスはその會衆と同に主を信じたり。また多くのコリント人聞きて信じ、且つパウロをアヤセむられたり。かくて主は彼、刻によりてパウロに召せり、懼るる勿れ、尙ほ語たりて歡きされ。如何となれば、われ彼と共に在るが故なり、且つ事も汝を欺く者なき。如何となれば、我がために多くの民、此の市のうちにあるが故なり。こゝまれば彼は神の言を欲へつ、彼等のうちには年と六月留まれり。

三 然るにガキリオがアキラの代官たりしとき、エグザ人、心を一つにしパウロに對ひて起てり。かくて彼を羅に連れ往き、云ひけるは、此の者は姪に背きて人を説き伏せ、神

を禁めしめんとす。一 然るにパウロ將に口を開かんとせしとき、ガキリオはエグザ人に對ひていへり、ああエグザ人よ、如何にも不義または惡の犯行なりしならば、官に祈ひてわれ汝等を捕へ忍ばん。エサれどもし汝等のうちの實、また名、また能に就きての論ならば、汝等自ら觀るべし、そはわれは此等の事の裁き人たることを敬せざればなり。二 かくて彼等を羅に驅り逐ひ出だせり。こゝ然るにすべてのキリシヤ人、會衆の長老シラスを捉へて、彼き座の前にて掛きたり、されどガキリオは此等の事を意とせざりき。

一 然るにパウロは彼等多くの目の間違ひし後、兄弟等に別を告げ、アリスキラ及びアキラと共に同に出でてスリヤに航り、チクレヤにて頭を剃れり。そは誓願ありたればなり。九 かくて彼はエペソに深きしとき、彼等をここに掛けり。されど已向らは會衆に入り来りてエグザ人と談せり。一〇 かくて彼等と偕に水く逆まらんことを彼等の誦ひしとき、彼は語はす、二 三 爲さざるべからず。されど神好とし給はば、我は再び汝等の許に歸らん。かくて彼はエペソより船出して、三カイサリヤまで下り来りしとき、上り往き且つ集會に挨拶したる後、アテナクに下り住けり。三 かくて彼の時を爲したれば、出で来りてガラテヤ及びフリギヤ地方を次々巡りつゝ、すべての弟子等を堅うせり。

二 然るに或るエグザ人その名はアゴ、その出生にてはアレキサンデリア人なる、能辯に

且つ親善に力ある人、エベンに賛けり。エベンの者は主の道を口授せられ、且つ靈に燃えてありしかば、主に就きての解を解かば、唯ヨハネのバプティスマを知るのみなりき。かくて此の者は會衆にて隠することなく語り始めたり。然るにアラムとアリスとを聞き、彼を迎へて御居家かに神の道を解き明せり。モかくて彼はアラムに感んを思ひしとき、兄弟等は弟字等に響き騰りて、彼を受け持れんことを勧めければ、彼は語り、意によりて償したる人々を天に助けたり。モそれは彼はイエスのキリストに於てこそを聖潔によりてなし、公にエブナ人を強く及び伏せられたればなり。

第十九章

またアガロのクリストにありしとき、バウロは上部地方を廻りてエベンに到れり。かくて彼人の弟子等を見出だし、三徒等に対ひていひ、汝等信せしとき聖靈を受けしや存や。然るに彼等は彼に對ひていひ、吾、我等は聖靈の賜を得ざるも乃ち彼等いへり、ヨハネのバプティスマにか。モまたバウロいへり、如何にもヨハネは彼に授れて來り給ふ所、即ちキリストイエスを信ずべきことを徒に云ひつゝ御心改のバプティスマにてバプティスマせり。モ乃ちこれをして聞きしとき、彼等は非イエスの名に入らばバプティスマせられたり。モかくてバウロの手を彼等に握りしとき、漸なる聖徒等の上に來り給ひければ、彼等は喜樂をもて語たり且つ讚美せり。モまた此の人々はすべて十二人程なりき。人またバウロ

は會衆に入り來りて隠すことなく語り、三ヶ月の間神の國に就きての事を説じ、且つ脱ぎ動めたり。然るに頑にして順はざりし者數人ありて、大衆の面前にて道を説りしかば、彼は彼等より離れ、弟字等に分れて、日に預ひてテラノスなる者の講堂にて談せり。モかくて二年の間かくありしかば、アラムに住める人々は、エブナ人もキリスト人もすべて、非イエスの言を聞き、然るにエブナ人なる渾波の別離人ありて、試に惡しき靈に動かせる人々に向ひ、非イエスの名を唱へて、彼等バウロが宣ぶるイエスによりて汝に命ず、と云へり。モまたかくていし者、エブナ人の察別長アケラの七人の子等なりき、一、然るに惡しき靈答へていひ、われイエスを知り、またバウロとは知合なり。されど汝等は誰なるや。モかくて惡しき靈に動かせるかの人、彼等に跳びかかり、勝ちて捉えられたり、且つ懸つきてかの家より預れたり。モされば此の事すべてエベンに住めるエブナ人にも、またキリスト人にも知れたれば、畏は彼等の上に落ち來り、且つイエスの名譽められたり。モかくて償したる多くの人が來りて告白し、且つその行爲を知りしめたり。モまた魔術を行へる多くの者は、その靈物を集めて持ち來り、すべての者の面前にて焚けり。彼等その價を舞へしに、銀五萬なることも見出だせり。モかくの如く主の靈は彼をもて畏れ阻つ強まれり。

二 又此等の事の成遂せしとき、バコロはウケドニヤ及びアヤを過りて、エルカレムに往かんことを、その靈のうちに定め、いひけるは、われ彼處にありし候、必らずもを見ざるべからず。三 かくて彼へたるオモチ及びエラストの騎人をウケドニヤに使はし、彼は一時ウケドニヤに覆りたり。四 然るにその期に當りて、道に就きて小さきらざる驍騎たり。五 是はアルチミアの靈を作りて、細工人等に少なからざる利を得しめたる渠江の、その名はオムチリナなる者、五 かく彼の事に係はる職人等を謀めて、人々を、汝等は我等の宮はこれより得るものなることを知る。六 又また此のバコロは、手にて成れるものは神々にあらずと云ひて、領りエソンのみならず、殆んど過ぐアジヤの群衆を説き動めて、悉はしたることは、我等の精るとこそ、また聞くところなり。七 是れ我等に我等のために、此の罪の類んせらるる危険のわかならず、大女神アルチミアの神靈も畏せしれ、全アジヤ及び全世界の知る大女神アルチミアの神靈も已てしといひたればなり。八 乃ち彼等これをして、道にて油たされ、叫びて、大なる戦エソンのアルチミアと云へり。九 かくて市は滿く風に瀆されたり。又また彼等はバコロの靈神なるウケドニヤ人、ガイオスとアルチミアとを捕へ、心を一にして刑場に押し入りたり。十 且つさればバコロ公衆の許に入り来らんと思ひしに、必ず等これを許さず。十一 又またアジヤ族の長等のうちにて、彼の友なる人々も、人を遣はして刑場に入らざらんことを我等に勸めたり。十二 是の故に或る者は此の事を叫びたり。十三

は集會亂れ、且つ多くの者は、何のために集まりしかを知らざりしが故なり。三 然るに彼等は群衆のうちより、アレキサンドロに進み出でしめしかば、エグナト人を押し出だしたれば、アレキサンドロ手摺をなして、公衆に對ひて精明せんと欲せり。四 然るに彼のユグナなることを認めしとき、すべての者より一齊に叫び喚りて、凡そ二た時ばかりの間、大なる戦エソンの人アルチミアと叫びたり。五 かくて書記役、群衆を鎮めて逃之けるは、人々エソンの人、何人がエソンの市は大女神にしてゼリヌより降れる、アルチミアの宮守たることを知りざる者あらんや。六 是の故に此等の事は打ち消し難きことなれば、汝等のために肝憂なるは、靜かにあることなり。七 且つ安なることは愚すべからず。八 是は汝等の連れ來れる此の人は、宮庭人にもあらず、また汝等の女神を拜する者にもあざればなり。九 是の故にアルチミア及びび彼に作ら細工人、もし何人にか對ひて言ふれば、彼等は聞かれ、且つ代官あり、彼等五に訴ふべきなり。十 されどもし他の事に就きて索めなば、彼に合ふ集會にて解くべきなり。十一 是は我等今川の靈に就きては、訴へられんことを恐めばなり。十二 即ち此の會合のために、誓を棄だし得べき理由、一も存することなし。十三 かくて彼は此等の事をいひて、集會を散したり。かくて靈の息みし後、バコロは弟子等を召びて、彼等に挨拶し、ウケドニヤに往かんとして出で來れり。十四 又またかの地方を過り、且つ多くの言をもて彼等を勸めつぎりに至りしに、かくて三つ月となりたれば、路にシリヤに船出せんとし

つありしに、彼に對ひて驚愕、エグナより企てられたれば、アクトニヤを編て歸らんと決心されり。かくて遠くアボナに至りて、彼に伴ひて行きしは、ペリアのソパル、またチヤコロケのアリスカ、コルにセクソフ、またアルメのガイオス、并に子モテ、またアソヤのチヤコ、并にトロピオなり。又此等の者は舟に乘りて、トロアスにて我等を待てり。然るに我等は所餘の日の餘、ビラビより航り出でて、五日にしてトロアスにて彼等の許に到り、そこに我等は七日間を暮れり。かくて湖の濱の日に、パンを煮くたじり、菓子等を備へしが、明るる日に用ひたるんとて、バコロは我等のために煮し、膏を煎じて、彼等に與へり。又また我等が集まりし陸上の家には多くの燈火ありき。然るに或る新者、その名はエラコなる者、密に伺り坐してありしに、燈を滅し、暗し、バコロが驚くこと愈々長くして、愈々預く眼に仰り、遂に三時たり、暗たり、かくて船は救せられしが、バコロ下り來りて、彼の手に依り、これを抱きていへり、聲を絶せ、その名の煙燻のうちに在ればなり。かくて彼は再び行き、パンを煮き且つ喰ひ、夜明けに舟を運ぶ船り合ひ、かくして棧、彼は立ち出でたり。かくて我等は舟に少少舟を連れ來り、少なかから歸り、然るに我等は先言さむるに到り、アソスにてバコロを乗せんとて船出せり。そは彼は徒然にて掛かんとて、かくて船に到り、アソスにてバコロを乗せんとて船出せり。かくて彼は我等を乘せて、ミナトに到り、我等と共に舟に乘りて、次の日にアソスの對に到り、また次の日、アソスに到り、

リオンに泊りて、次の日ミントスに到れり。そはバコロはアソヤにて時を費すことなからんために、エソソをば航り越えんと決したればなり。そはもし能ふべくんば、ペニコアの目はエソソに在りんとて念きたればなり。かくて彼はミントスより「人を」エソソに遣はして、渠等の長老等を召び寄せたり。乃ち、彼等の彼の許に到りしとき、彼はこれにいへり、汝等は我がアソヤに來りし物の目より、すての時、如何に汝等のうちに我が在りしかを知る。云「我はあらゆる處と、多くの旅と、エグナ人の所なる所許のうちにて、我にふりかかりし誠をもて共に居、三、益ある事は現すところなく、汝等に知らしめ且つ公にまた家より家に汝等を教へ、三、神に到りての悔ひ歎、また我がの主エスキリストに對ひての信仰を、エグナ人にも、またキリスト人に傳へに留せり。三、されど今見よ、我は家に歸を受けてエルサレムに往く、彼處にて如何なることに由りて、何を知らず。三、唯聖なる靈は誠に證して、市ごとに神と我を待つ、と云ひ給ふのみ。三、されど我が「歩むべき」行程と、主エスより我が受けし業事とを察して、究らし、神の恩の圖書を心に記するためには、何等の膏をも爲さず、また我が魂をも滅んせざるなり。三、されば今見よ、我は神の國を直つ、汝等のうちを經過し我が旗を汝等に立て、再び目のおたり息するべきことを知る。三、かかるが故にわれ此の日汝等に證す、我は預くして、すての血に保たし。三、そはわれ神の旨を汝等に證すことなく、すててこれを汝等に

知しめられたればなり。六 是の故に汝等自ら心にせず、また耶なる黨の、汝等を立て、神の山が崖にて買ひ給ひしところの聚會を救すべく、見命人となし給へるその群のすべのためにかんざす。七 我は我が去るの務、群を惜まざる暴き黨の、汝等のうちに入り來りんとすことを知らせばなり。八 また汝等のうちより弟子等を引き抜き、己に從はしめんために、能れる事を請たる人々起せし。九 かくが故にわは三年の間、日も夜も休むことなく、涙をもて汝等一人一人を諭すことを擲り用てつ終めよ。三 されば兄弟よ、今われは汝等の徳を超て、またすべの聖くせられたる者のうちに、訓業を汝等に與へ給ふことを得るよ。この神に、またその無の首に汝等を委ねまつる。四 われは人の頭、または衣服を穿かたることをなし。五 されど我が此の事は、われ及びわれと共に在りし人々の必要のためは、汝がせしことは汝等も知るところなり。六 われ汝等もかく勞して、聖者騎人々助は、また愛くもとり與ふるは願なり、と復しく言ひし、またその首を擲り用てきたることを、すべの者に於て來したり。七 かくて汝は此等の事をいひて、その味を同め、汝等のすべと同一に祈り。八 さればすべの者々に敬き、パウロの頭を抱き、眞心こめて汝に慰めし。九 人々に、その頭をもはや有ることなからん、と謂ひし言のため悲しめり。かくて汝等は船まで彼を送りたり。

第二十一章

かくて我等は彼等より引き抜き、船を出せしとき、眞直に走せてゴスに、

また次の日ロヌに、またそこよりバカラに到りて、ニヒクに越ゆる船を見出し、これに乗りて船出せり。三 かくてクテロを望みつ、それを左に掛き、シリヤに航り、かくてソロに著り。是は彼陸にて船は擱舟を御さんとしたればなり。四 されば我等は弟子等を尋ねて逃ひ、彼處に七日逗留し、彼等は黨によりて、エカサレムに上る勿れ、とパウロに云へり。五 然るに我等は日數滿ちたれば、出で旅立ちしとき、すべの人々妻及び兄弟等と共に遠く市の外まで我等を送り來れり、されば遠邊に聲を風めて我等は祈れり。六 かくて互に挨拶をなし、て候、我等は船に乗り込み、また彼等は船の口の口に歸れり。七 かくて我等はソロより船路を終りてトレイに渡り、されば兄弟等に挨拶し、彼等を併に一日居れり。八 また大くる日に出で來りてパウロと共に人々をカイサリヤに到れり。かくてかの七人のうちなる屬皆宣傳者シリゴの家に入り來りて、七日彼と併に居れり。九 また此の者に豫言する預言なる四人のいひありき。一 かくて我等多日の閑遊まりしに、一人の豫言者その名はアガボなる者、エズヤより下り來りて、二 我等の許に來り、且つパウロの帯を取り、かくて自ら己の手と足とを縛りていへり、聖なる黨かく云ひ給ふ、此の帯を持つところの人を、エズヤ人はエカサレムにて、かく縛りて國人の手に付さん。三 されば我等は此等の事を聞きしとき、我等も處の人々も、エカサレムに上る勿れ、と彼に勸めたり。四 然るにパウロ答へり、汝等何ぞ我が心を挫くや。是は我は主イエスの名のためには、常にエカサレムにて縛らるる

然るに彼は階段の上に現はれしとき、研察の發行のゆゑに、彼は兵卒に負はるに到れり。三

そは民の大衆、彼を除け、と呼びつゝ眼を來りたればなり。

然るに階に降に降に連れ入れんとせしとき、バウコ平人長に云ふ、われ汝に何ぞいふを得しきや否や。乃ち彼達之けるは、汝等リクテ語を知んや。三又汝は此等の日以前に何處を起して、四千人の騎隊者を聖野に連れ出だししエゾント人におらずや。又然るにバウコ平人、我は如何にもオウロのニクヤ人にて、オウリヤの感しかる市市民なり。爾々は民に到ひて訴たることを許せ。

思ひ、乃ち彼は許しければ、バウコ階段の上に立ちて、民に對ひて手振をなし、大に黙するに及びて、ヘブル語にて述べて、云ひけるは、

第二十三章

人々兄弟及び父等よ、今汝等に對ひて我が辨明することを開け、乃ち

汝等はヘブル語にて、彼の處へ出づるを聞きたれば、増々益々主たり、かくて彼達之けるは、三我は如何にもオウリヤのオウロにて生まれたるニクヤ人なり、されど此

の由のうちにて、ガイリエルの屋下に降ち、先祖等の授の正に稱ひて訴へられたれば、此の目すべての法等がある如く、神に對ひての熱心者なり。四我は斯の道の者を男をも婦をも稱り、且つ、聖書に於て死に至るまで追慕し、三祭司長も、またすべての長老衆も、我がために懸するが如く、汝はオウロのオウリヤ兄弟等に屬する書狀を受け、彼方にあむししかの人々を稱りて、

彼等の聞せらるるために、エルサレムに連れ來らんとてオウロにまで往けり。五かくてオウロに近づきたるとき、我に傍りしは、寒の國中より、俄に大なる光より輝きて、我を輝り照せり。六さればわれ地に伏したり。かくて、サウロ、サウロ、何故に汝は我を道言するや、と我に云ひ給ふ聲を聞けり。七さればわれ答へけるは、主よ、汝は誰におはすや。彼また我に對ひて曰へり、我は汝が道言するところの、オウロ人なるオウロなり。八然るに我を同にありし人々は、光を著て慄を生じたり、されど語たり給ふ彼の聲をば聞かざりき。九かくてわれいへり、主よ、われ何を爲すべきや。主また我に對ひて曰へり、起つてオウロに往け。されば汝等之く汝のために、定められたる事はすて、彼處にて語らるべし。一〇また我はかの光の榮光によりて視なきざりし故に、我を同にありたる人々によりて、手引せられてオウロに到れり。二かくて彼に稱ふ敬虔なる人にて、彼處に住めるすべてのニクヤ人より護せらるる、オウロなる者、三我が許に來り、且つ立ちて我にいへり、兄弟サウロよ、御上げよ、乃ちその時われ彼を觀上げたり。四彼またいへり、我等の先祖等の脚は、彼の意を知り、また驚しき者を見、また彼の口の聲を聞かしめんとて、汝を立て給へり。五そは汝は彼のためにすべての人に對ひて、汝が觀しとる、また聞きし「とる」の事の證人たるべければなり。六されば今何ぞ躊躇するや。起つて主の名を呼び、オウロにせられて汝の罪を洗ひ去れ。七かくて我のエルサレムに歸るに及びて、神殿にてわれ新りしとき、痛を渡へる様の心地に

なれり。一八かくて、急げ、且つ遂にエラサレムより出で來れ。如何となれば我に就きて汝の證を、彼等は受けざるべきが故なり、と我に云ひ給ふ彼を見たり。一九さればわかれいり、主と、我は何れの會に於ても、汝を信する人々を極意に授け、また打ちたりしことを彼等は知る。二〇且つ汝の證人エラサレムの血の注ぎ出されしとき、我も自ら傍に立てて彼の殺さるるを可とし、且つ彼を殺しし人々の主を縛りたり。二一また彼は我に對ひて曰く、往け、と、そはわれ汝を出だして遠く國人に傳はすべければなり。

二三然るに彼等は聞きて此の言に拒り、聲を擡げ云ひけるは、かくの如き者なほ何より取り去れ。そは彼を生かしむべきにあらずればなり。二四かくて彼等の叫ぶつ、また主を怒り、つ、また城を海中に投げつありしとき、二百千人は命じて陣營に彼を捕れ、何故に彼等はかく彼に對ひて叫ぶかを、密かに知りたために彼を時味せしむ。二五又は軍隊をもて彼に馳せんとせしとき、バウリ傍に立てる百人長に對ひていり、ローアに上り且つ罪に對し、汝は汝を離つこと、汝等には許しきことなるや否や。二六乃ち百人長はこれを聞き、逃がれ去りて千人長に報して、云ひけるは、觀よ、汝は何を爲さんとするや。そは此の人はローア人なればなり。二七乃ち千人長は往きて彼にいり、我に云、汝はローア人なるや否や、彼乃ち逃之けるは、然り。二八千人長はまた答へけるは、我は又なる高一の金子をもて此の民衆を縛たり。然るにバウリ逃之けるは、我は生まれながらなり。二九是の故に彼を飲せんとし

てありし人々直に去り、且つ千人長もその口へ人なることを密かに知りたれば、彼を縛りしととを解れたり。

三〇かくて明る日に、何故に彼はエラサレムに訴へられしか、その疑なることを彼は知らんと思ひ、彼の解を解き、且つ祭司長等及び公議會に命じて到らしめ、バウリを連れ下りて彼等

第二十三章

かくてバウリは議會を辯護めていり、人々兄弟よ、我は此の日に至るまで、あらゆる欲き良心をもて、神に對して市民たりき。二然るに祭司長をアニア、彼の傍に立てる人々に命じて、その白を拵かしめたり。三そのときバウリ彼に對ひていり、白く預りたる觀よ、神は將に汝を拵き給はんとす、汝は捉に預ひて我を殺さんとて坐せしに、觀に擧りて我を拵くことを命ずるか。四然るに傍に立てる人々いり、神の祭司長を汝は罵るか。五乃ちバウリ逃之けるは、兄弟よ、我は彼の祭司長なることを覺むざりしなり。そは、汝は數の民の長を惡しく謂ふべからず、と鐵きられたればなり。六然るにバウリは抄下カイの人々、また一部はバウリカイの人々なることを知りて、議會のうちにて叫び出でけるは、人々兄弟よ、我はバウリカイの子なるバウリカイにして、死人の體も家とに就きて我かるなり。七乃ち彼のかく語たりしとき、バウリカイの人々と抄下カイの人々との争を生じ、かくて大衆分れたり。八そは抄下カイの人々は、如何にも雖も天使もまた體も無しと云へど、

バライの人は執れをも奪はずればなり。九ぎれば大なる味となりて、バライ人の劍の味者等立ちて争ひ、云ひけるは、我等は益かも此の人に感しきことあるを見出だす、且つ爾まは天使の彼に翻たりしならんには、我等をして神に還らひ願ふことなからしめよ。一〇かくて大なる争となりければ、千人長は彼等によりて、バライの引き致かれんことを恐れ、軍隊に命じて下り行き、彼等のうちより彼を奪ひ去つて、陣營に連れ往かしめたり。

一 然るにその夜、主は彼の傍に立ちて曰へり、バライ、勇ましかれ。そはエルクサレムに我に就きて歸に離せしその如く、汝は必ずソロにても隠せざるべからざればなり。二三かくて目をなましとき、敵人のエライ人は仲間をつくり、互に己を呪の下に匿き、バライを殺すまで汝等は祭司長及び長老等の許に逃み行きていへり、我等はバライを殺すまで、何を味はずと呪をもて互に誹ひたり。二五是の故に今汝等は議會を作り、千人長の許に現はれ、彼に就きての事を問は奉かか知りんとしあるが如くに駢ひて、明くる日に彼をして汝等の許に傳を置け下らしめよ。かくて我等は彼の近づくに先んじて、これを殺さんとする用意あり。二六然るにバライの姉妹の子、この特使を聞きては、近寄りて陣營に入り來り、バライに報じけるに、エバライ百人長の一人を召ひ、送るけるは、此の若者を千人長の許に連れ往け、そは彼は彼に報ずべき事あればなり。二八是の故に彼はこれを千人長の許に連れ往きて、送るけるは、因人バライ我を召びて、汝に語らるべき事あれば、此の若者を汝の許に連れ往かんことを請へり。二九されば千人長は彼の手を捉へて退き、人を遣り奉ねけるは、汝の我に報せんことを持つところの事は何ぞや。三〇乃ち彼いへり、エライ人はバライに就きて何ほ奉かに本國へき事あるが如くに駢ひて、明くる日に汝の彼を議會に連れ下らんことを、汝に請ふこと一致せり。三二是の故に汝は彼等に馳き伏せるる勿れ、そは彼等のうち四十餘人（人）の者ば、彼を殺すまでは汝はすまた飲まずと、互に己を呪の下に匿きて待伏し、汝よりの約束を用意して待てばなり。三三是の故に千人長は若者を去らしめて、命じけるは、汝われに此等の事を打ち明けし、誰にも語らる勿れ。三四かくて彼は二人の百人長を召びていへり、夜の第三時に遠くカイザリヤに往くために、兵卒二百（人）及び騎兵七十（人）并に騎兵二百（人）を用ゑせよ。三六また歌を唱へてこれにバライを乗らしめ、大守バライの許に無事に送れ。三五またかくの如き事を承てる警状を置めたり。三六此の人はエライ人に捕へられて、將に彼等に殺されんとせしとき、汝のロー人なるを知りたれば、軍隊を伴ひ到りて我を捉へたり。三八かくて彼等が彼を跡のために平安を斷る。三九此の人はエライ人に捕へられて、將に彼等に殺されんとせしとき、汝のロー人なるを知りたれば、軍隊を伴ひ到りて我を捉へたり。三八かくて彼等が彼を跡へし刑由を知らんと思ひ、彼を議會に連れ下りしに、二九彼は彼等の掟の論に就きて訴へらるることを見出だせしが、死または彼の訴を受くるには値せざるなり。三〇且つ此の人に對ひてエライ人によりて、將に仕送りしれんとする密計を我に知らせられたれば、時を移さず、彼を

るは、因人バライ我を召びて、汝に語らるべき事あれば、此の若者を汝の許に連れ往かんことを請へり。二九されば千人長は彼の手を捉へて退き、人を遣り奉ねけるは、汝の我に報せんことを持つところの事は何ぞや。三〇乃ち彼いへり、エライ人はバライに就きて何ほ奉かに本國へき事あるが如くに駢ひて、明くる日に汝の彼を議會に連れ下らんことを、汝に請ふこと一致せり。三二是の故に汝は彼等に馳き伏せるる勿れ、そは彼等のうち四十餘人（人）の者ば、彼を殺すまでは汝はすまた飲まずと、互に己を呪の下に匿きて待伏し、汝よりの約束を用意して待てばなり。三三是の故に千人長は若者を去らしめて、命じけるは、汝われに此等の事を打ち明けし、誰にも語らる勿れ。三四かくて彼は二人の百人長を召びていへり、夜の第三時に遠くカイザリヤに往くために、兵卒二百（人）及び騎兵七十（人）并に騎兵二百（人）を用ゑせよ。三六また歌を唱へてこれにバライを乗らしめ、大守バライの許に無事に送れ。三五またかくの如き事を承てる警状を置めたり。三六此の人はエライ人に捕へられて、將に彼等に殺されんとせしとき、汝のロー人なるを知りたれば、軍隊を伴ひ到りて我を捉へたり。三八かくて彼等が彼を跡のために平安を斷る。三九此の人はエライ人に捕へられて、將に彼等に殺されんとせしとき、汝のロー人なるを知りたれば、軍隊を伴ひ到りて我を捉へたり。三八かくて彼等が彼を跡へし刑由を知らんと思ひ、彼を議會に連れ下りしに、二九彼は彼等の掟の論に就きて訴へらるることを見出だせしが、死または彼の訴を受くるには値せざるなり。三〇且つ此の人に對ひてエライ人によりて、將に仕送りしれんとする密計を我に知らせられたれば、時を移さず、彼を

彼の許に置し、隊人等に命じて彼に對する事を汝の前に云はしむ。徒なれ。
 二 汝の故に兵卒等は命に懸けてバコロを取リ、夜に乗じてアムパリスまで連れ行き、
 三 かくて明くる日に船兵に乘せて彼を伴ひ往かしめ、徒等は陣營に歸りたり。四 徒等は力
 イギリヤに入り来りて、權取を太守に渡し、またバコロをも殺し出たせり。五 乃ちホルこれ
 を讀みて、彼は何處につきてあるかを制ひ、かくてキリヤより「の者」なることを得め、
 六 總てけるは、汝の訴人等の語りしとき、異に汝に聞くべし。かくて「ロソ」の處にて討ちるこ
 とを彼に命じたり。

第二十四章

かくて五日の後、南兵アニアは、長老等及び騎士アルトロなる者と共
 に入り来りて、バコロに對し太守の許に現はれたり。七 かくて彼の言は
 れしとき、アムパリスを始めて云ひけるは、八 最も貴き「リクム」と、我等は汝によりて大罪を
 享け、且つ汝の先見によりて諸の世良この國人のために施されたれば、四方何れの處に於ても、
 九 あらゆる處罰をもて之を受く。十 されど汝く汝を始ることなからんために、簡單に「剛宗れ
 ば」汝の罪咎をもて我等に聞かんことを乞ふ。十一 是は我等此の人は投擲にて、世界のすべての
 エグナ人のうちに懸せ給り立つる者、またサザレ深の首領なるを見出だしたればなり。十二 彼は
 神罰をも怖さんと念てたり。我等これを見て、我等の處に預ひて殺かんと欲したりしが、
 十三 千人兵を以て、暴力をもて我等の手より彼を奪ひ去り、八 彼の隊人に命じて汝の許に

集しめたり。徒等のすべての者に就きて罰て置てば、我等が彼を斬ふところの事を、汝自
 ら彼より密かに知ることを得べし。九 またエグナ人も一致して、此等の事かくありと述べたり。
 十 かくて太守は言して、六 汝へく彼に知らしめば、バコロ答へけるは、多年の間、汝は此
 の國人に殺せたることを知るが故に、我は喜びて已に就きてこの事の辨明をなす。十一 我は邪
 のためエセサレムに上りし後、彼處に在ること十二日より多からざるを汝は知り御べし。十二
 また彼等は神罰にて我の人を殺じ、または昏惑にて若しくは市にて、新衆を聚がしたるを見出
 だせざりき。十三 また彼等は今我を斬ふところの事に就きて確に誓ふことを得ざるべし。
 十四 されど我はこれを汝に肯行す、即ち我は徒等の氣類と解ふる道に預ひて先祖等の神に服亦
 し、汝のうちにまた贖買者等に、殺されたるところのすべての事を償し、十五 彼等も自ら待つ
 ところの、殺しき者も義しからざるをも、死人の魂の將にあらんとすることの望を、神に向ひ
 て抱くなり。十六 最も我は已自ら神と人とに對ひて、但に良心の責なからんことを勉む。
 十七 また我は多年を経て、我が國人に施を爲し、また贖買物せんとて語りしが、十八 その時彼
 等は私の初般にて謝められたれども、新衆を伴はず、また處をも伴はざりしを見出たせり。十九
 せどアギリヤよりのエグナ人敷人ありき。二十 徒等にしてもし我に逆ひて何事かを有たば、必
 ずその人々汝の前に置はれ、且つ罪をさぐるべからず。二十一 然らずんば此等の者「羅に」議會の
 前に集が立ちしとき、徒等にしてもし我に不義なるものを見出だししならんには、今彼等をし

て自らこれはいしめよ。三 我は此の日、死人の甕に就きて、汝等に裁かるを望む、彼等のうちに立ちつ叫び出でし、此の一と塵に就きてより、他にあることなし。

三 乃ち此等の事を聞きて、ペリクヌは遂に就きての事を尙ほ疑ふかに知りたれば、彼等を停めていへり、千人長ルツマスの下り来れるとき、われ汝等に係はる事を取調ぶべし。三 かくて百人長に命じて、パウロを護りて身からしめ、且つ彼のために使役し、またはその許に到る者を辨ずることなからしめたり。

二百 かくて數日の後、ペリクヌはエグナなるその妻テラを仲ひ留り、パウロを迎へて、キリストに於ける信仰に就きて聞けり。五 乃ち彼は義と自制と、將にあらんとする城とに就きて談せしかば、ペリクヌを生して答へけるは、今は往け。機あらば汝を召び寄せん。三 其の時彼はパウロを釋さんために、彼より金子を興へられたことを望みし故に、屢々彼を迎へて共に語り合へり。三 然るに二年滿ちて、ペリクヌはホルキオへストを後任者として受けられたれど、エグナ人の好意を得んと欲したれば、パウロを縛りたるままに携きたり。

第二十五章

是の故にへストは領地に到りて、三日の後カイザリヤよりエロソルマに上れり。三 然るに祭司長及びエグナ人の直立たる人々、パウロに逆らひて彼の前に現はれ、三 且つこれを途に待伏なして殺さんとて、彼に逆らひて好意を求めつゝ、エルサレムにこれを迎へんとを乞へり。四 是の故にへスト答へて、パウロはカイザリヤにて

隠られ、また己自らも將に隠なく出で往かんと思はざるが故に、五 汝等のうちの方ある人々も同に下り往きて、もしかの人に何事かあらば、彼等をして懸へしめよ、と述べたり。六 かくて彼等のうちにて十日餘りを費して、彼はカイザリヤに下り往き、明くる日義き座に坐して、パウロを連れ來らしむ。七 かくて彼の語りしとき、エロソルマより下り來りしエグナ人、その團に立ちてパウロに逆らひ、彼等が確に辯ずること能はざる多くの重き訴を提出せり。八 彼は辨明すらく、我はエグナ人の誑にも、またカイザルにも、罪を犯したることなし。九 然るにへストはエグナ人に對して好意を得んと欲して、パウロに答へていへり、汝はエロソルマに上り往き、此等の事に就き、彼處にて我が前に裁かることを欲するや。一〇 然るにパウロいへり、我はカイザルの義き座の前に立ちつあり、此處にて我は必ず裁かざらざらんがす。汝も良く辯明かに知るが如く、我はエグナ人を害ひたることなし。二 是はわれもし如何にも害をなし、また死に備すべき何等かを犯したらんば、死することを選ばざればなり。されどもし彼等が訴ふるところの事、一つもあることなくば、我を彼等に與へ得る者なし。我はカイザルに上告す。三 そのときへストは協議會に詣りて、答へけるは、カイザルに汝は上告せり、カイザルの許に往くべし。

三 かくて數日を經しとき、アグリッパ王及びエルニケは、へストに挨拶せんとてカイザリヤに往けり。四 また彼等は多日の間留まりし故に、へストはパウロに關はる事を陳べて、云

ひけるは、ペリクスより此處に描かれたる一（人）の囚人あり。五 彼に就きて我は教諭エロコル
 アに在りしとき、祭司長等及びユダヤ人の長老等現はれて、彼に對ひて刑の宣告を求めければ、
 「われ答へけるは、訴へられたる者の、訴へたる者に顔と顔と相對ひて、訴の事に就きて辯
 明する機を得ざるうちに、矢はるため、如何なる人にもせよ、これを與ふるはローマ人の例に
 あらずと。七 是の故に彼等が此處に集まり來しとき、我は時を移さず、次の日裁き座に坐し、
 命じてかの人を連れ來らしめしに、八 彼に就きて訴ふる人々立ち上りしが、我が想ひしと
 のの罪をば一つも提出せず、九 唯彼等が彼に逆らひしは、彼等の宗旨に就きてと、バカロ
 の如き論に關はりては遊むところの死にしエヌなる者に就きての論のみなりき。一〇 さればわれ斯く
 とを哀むや、と彼に云へり。三 然るにバカロはセバストの剣決のために隠れんことを上告
 しければ、カイザルの前に送るまで、彼を置くべく命じ置けり。三 アグリッパかくてヘスト
 に、我も自らかの人に關かんと思へり、と進へければ、明くる日に汝は彼より聞へし、と彼
 は述べたり。
 三 是の故に明くる日に、アグリッパ及びヘルニアは大なる威儀にて到り、千人長等及び市
 の重立ちたる人々を作り、閩陞所に入り來りたれば、ヘストは命じて、バカロを連れ來らしめ
 たり。四 かくてヘスト進へけるは、アグリッパ王并にすべて列席の人々よ、此の者を痛し、

第二十六章

ユダヤ人の大衆聚りて彼に就きて、エロコルにても此の處にても我に訴へて、もはや彼は生
 くべからず、と叫び出でたり。五 然るに我は彼の死に値すべし何事をも犯ししことなきを認
 め、且つ此の終も自らセバストに上告しければ、われ彼を送らんと決したり。六 「されど」
 彼に就きて「我が」主に背き馳るべき處なる事を有せず、かゝるが故に汝の所に彼を連れ出だせ
 り。アグリッパ王よ、われ瘡き馳るべき毒箱を得んがために罰をなさんとて、特に汝の前に
 「連れ出だせるなり」。七 是は彼に對する罪を明かに表はさずして、囚人を送るは理に合はず
 と思はるればなり。
 アグリッパかくてバカロに對ひて進へけるは、汝許されたれば己のため
 に、ユダヤ人に訴へられたるすべての事に就きて、アグリッパ王よ、今日汝の前にこれを無明
 するを得るは福なり。三 殊に汝はユダヤ人のうちの、すべての例と斷とを熟知せり。かゝるが故
 に願くは忍びて我に聞け。四 是の故に我は切き時とり、エロコルにて我が國人のうちにあり
 たれば、我は如何に世を過ぐししかを、初よりユダヤ人はすべてこれを知る。五 彼等は「かく」
 始より我を知りたりたればもし彼等にして欲せば、我は我等の宗數のうちの最も嚴しき派に属して
 存ふる、パリサイ人なることを避することを「得ん」。六 されど今斷より先祖等になされたる約
 束を破むがために、我は立ちて裁かるなり。七 アグリッパ王よ、これがために「即ち」我等の

十二の族の夜も日も、熱心に「神に」服事して遊さんと現むところの望に就きて、我はエグヤ人に眠られたなり。ハ神も死人を起し給ふとも、何故に信じ難きことなりと、汝等に斷言するや。九是の故に我は如何にも「サレ」人なるイエスの名に逆らひて、必ず多くの事を信ぜざるべからずと自ら思ひたり。一〇これエロソルヤに於ても我が爲しところにして、祭司長等より權を受けて、多くの聖徒等を禮倉に閉ぢ込め、且つ彼等の殺さるときは、われこれに同黨せり。二またすべての會堂に稱ひて、屢々彼等を罰し罰すことを強ひ、また大いに彼等に逆らひて狂ひ、これを迫害して遠く外國の市にまで到れり。三その頃祭司長等よりの權と強任とをもて、ダヌコに往けるとき、三日の風巾、その邊にて王よ、我は天よりわれ及びわれと同行ける人々を繞り照らす、陽の輝にも勝れる光を見たり、二四されば我等はすべて地に打ち伏したりしとき、我は「フル語にて、サウクロ、サウクロ、何故に我を迫害するや、汝刺ある鞭を蹴るは難し、と云ひつゝ我に對ひて誑たり給ふ聲を聞けり。二五われ乃ちいへり、王よ、汝は誰におはすや。彼また曰へり、我は汝が迫害するところのイエスなり。二六されど起きよ、且つ汝の足にて立て、そはこれがためにわれ汝に現はれたればなり。二七即ち汝を立てて、汝の見しところ、また我が汝に現はんとすることの使丁とし、二八汝を民と國人のうちより取り出だし、今その人々のために汝を使はし、二九その目をひらかんとせり。是れ「彼等の」暗より光に、またサタナの權より神に歸するため、是れ彼等の罪の故と、我に在るところの指

仰にて、聖められたる人々のうちに、剛毅を彼等の要けんためなり。一それ故に「アグリッパ王よ、我は天なる此の現示に順はざる者とならず、二三されと先づダヌコ、次にエロソルヤに在る人々、及びエグヤのすべての地方、并に國人に悔ひ改めて神に歸り、悔ひ改に値する行爲を爲すべきことを知らしめたり。三此等の事のために、エグヤ人は神殿にて我を捕へて殺さんと企てたり。三是の故に我は神より神を得て、此の日に至るまで立ちて、小なるものにも、大なるものにも、隠して云へるは、豫言者等もモラセも、將に獲らんとすとと斷たれるところの事以外ならず、三もししくは「キリストの」啓を受け給ふべきことか、もしくはは彼は死人の甦の最初にして、民と國人に宣傳すべき光におはすことかなり。四かくて彼は此等の事を辯明しつゝありしとき、ハスト大聲に述べけるは、パウロよ、汝は狂氣せり、博學汝をして狂氣せしめたり。三五然るに彼逃へけるは、最も實き「ストよ、我は狂氣せしにあらず、されど眞理にして憶なる詞を陳ぶるなり。三六そは王は此等の事に就きて知らせられたれば、我も應ずることなくこれに「語」たるなり。そは此等の事は一つとして彼より隠れたりとは、われ確信せさればなり。そはこの事は片隅にて行はれたるにあざさればなり。三七「アグリッパ王よ、汝は豫言者等を信ずるか、われ汝の信ずることを知る。三八「アグリッパ乃ちパウロに述べけるは、汝は少しく我を驚き勵めて、キリストアソとならしめんぞす。三九パウロまたいへり、少しにもせよ、また多くにもせよ、我は唯汝のみならず、此の日に我に聞くすべての人々の此等の細なくして、

我が如き者となんことを神に願ふなり。三 かくて彼が此等の事をひひしき、王及び太守、またペルニケ、并に同席せる人々すて立ち上り、三 且つ互に船たりて、此の人々は、もしカイオルに上せざりしならば、此の人は去らしめらるべかりしなり。

第二十七章

かくて我等のイタリヤに向け航り往くべし決せられしとき、彼等はパウロ及び他の數人の囚人をば、セムス隊の百人長、その名はエリアスなる者に付せり。二 乃ち我等はアジヤの處々に寄りて航らんとする、アトラテノの船に乗りて出づ、アコロニケのウクレド、アリスタルコ我等と同にあり。三 かくて次の日に我等シボンを着きしに、エリアスはパウロを親切に扱ひ、その友等の許に往きて、彼等の世話を受くることを許せり。四 かくて彼處より船出せしが、風の逆ふるによりてアコロの下を帆走り、五 またキリキヤとパルソニアとに沿ひたる海を航り越し、ルキヤのムラに着けり。六 然るに彼處にて百人長は、イタリヤに航るアレキサンネリヤの船を見出だし、我等をそれに乗り込ませたり。七 かくて多日の間船足おそく、漸くにしてクニアの對に現はれしとき、風は我等を許さず、サルモネに對ひクレテの下を帆走りて、八 岸に沿ひつ、漸く良き港と稱する處に到れり。その近くにアサの市ありき。九 かくて多くの時を過ぐし、且つ船路は既に危かりしかば、斷念も過きしゆへに、パウロ勸めて、一〇 彼等に云ひけるは、人々よ、われ此の船路は難あり、

且つ損多くして濟に救術と船のみならず、尙ほ我等の魂にも及ばんとすることを看るなり。二 然るに百人長はパウロの云ひし事よりも、反つて船路と船主とに説き伏せられたり。三 かくて此の港は冬雜するに適せず、多くの人々も、彼處より船出し、もし能ふべくんば、南西と北西とを視るにニケに著き、彼處にて冬雜せんことを勸めたり。四 かくて南風除るに吹きければ、彼等は港を待たりと思ひ、錨を揚げ、クレテの岸に沿ひて進めり。五 然るに幾ばくもなぐして、エカロクルトと稱する暴風、厲より下るし來りて、五 船を吹きさらひ、風に船首を向くること能はず、追はるるに強せたり。六 かくてクラウダと稱する小舟の下を走りつ、漸くにして艇を左右することを得たれば。七 一モ 彼等はこれを受けて用ゐるその助に船に錨をなし、浮洲に陥ることあらんことを恐れ、帆桁を低めて進はれたり。八 されど我等は一方ならず暴風に難められしが、次の日彼等は錨符を投げ棄て、九 又また三日めには我等手づから船具を棄てたり。一〇 かくて多日の間、船も星も頭はれずして、暴風烈しく吹き狂ひたれば、我等の救はる望は全く盡はれたり。二 かくして久しく經食せしが、そのときパウロ彼の等の腹中に立ち上りていへり、あの人々よ、汝等は必ず我に順ひ、クレテより船出せずして、此の艇とを棄けずにあらざるべからざりしなり。三 されど各われ汝等に勸む、勇ましかれ、是は汝等のうち一人も魂を失ふ者なく、唯船を失はんのみなればなり。四 是は此の表、我が屬するところ、我が服するところの神の一二人の天使、我が傍に立ちて、三

パロト、憚る勿れ、汝は必ずカイサルの前に立たざるべからず、且つ見よ、神は汝と共に概その人々を、すべて汝に與へ給ふ、と云ひたればなり。三二 かかるが故に勇ましかば、汝等は必ず或る小島の上に落ちざるべからず。三三 かくて十四日めの夜になりて、我等アトリアの海に追ひ廻されしが、夜半の頃、水夫等は或る地方に近づきたりと想ひて、三八 測りに、二十餘なるを見出だせり。かくて少しく進み、復た測りて十五餘なるを見出だしたれば、三九 岩洲の上に落ちんことを懼れ、彼等は櫃より四つの鐵を投げて、夜明となるを待ち乞ひたり。三〇 然るに水夫等は船より運れ出でんことを索め、鐵を船より投げんとするに託けて、艦を海に下ろしたり。三一 パロト百人長と兵卒等にいへり、もし此等の者船に居らずんば、汝等は救はるゝこと能はざるなり。三二 そのとき兵卒等鐵の綱を根元より切り放ちて、その艇を落したるなり。三三 かくて夜明にならんとする前、パロトはすべての者に食物を共に享けんことを勧め云ひけるは、汝等引き續き食物を擲らずして待ちしこと、今日にて十四日めなり。三四 かかるが故にわれ汝等に食物を擲らんことを勧め、それは是れ汝等の救はるゝためにて、汝等の業の一筋も落つることなかるべければなり。三五 また彼は此等の事をいつつパンを取り、すべての者の面前に神に感謝し、且つ喫きて喰ひ始めければ、三六 彼等もみな勇ましくなりて食物を擲れり。三七 また我等船に在りし者は二百七十六人なりしが、三八 亦分に食事をしたれば、彼等は疑

第二十八章

物を海に投げ出して船を輕めたり。三九 かくて夜明になりしとき、彼等は陸を認めざりしが、淺邊ある或る入海を見かけたれば、もし能ふべくんばそれに船を進めんと企てたり。四〇 されば彼等は船を斷つて海に飛て、同時に船綱を解きて風に前帆を揚げ、瀆邊を指して進みたり。四一 然るに二つの海の會ふ處に陥りて、船を瀆に墜り上げたれば、船は居つきて動かずなり、且つ船は激しき波にて破られたり。四二 されば兵卒等は囚人の泳ぎ出でて通ぐべきを應じ、之れを殺さんと協議せり。四三 然るに百人長は、パロトを救はんと思ひたれば、彼等の所存を妨げ、且つ泳ぎ得る者に命じて、先づ跳び入りて陸に上り往かしめ、四四 またその餘の者をば、或る者を船板にて、また或る者をは何ぞ船よりのものにて去らしめけり。さればすべての者はかくの如くにして無事に陸に送られたり。四五

かくて我等救はれしとき、かの島をメリタと呼はるゝことを案かに知りたり。四六 また我等尋常ならざる親切を我等に表はせり。それは降る雨と氣とのゆへに、火を焚きて我等のすべてを達成したればなり。四七 かくてパロトは衆くの樂を東ねて、火の上に置きたれば、熱氣によりて煙出で來り、その手に觸れり。四八 されば我等彼の手より懸れる生き物を見しとき、互に云へり、此の人は必ず人を殺せし者なり、海より救はれたれど、正義はその生くることを許さず。四九 是の故に彼はかの生き物を火の中に投り擲ひたれば、害を受けざりき。五〇 然るに彼等は彼の炎衝を避ずか、または倒れて瀆に死するなりと云ふ

展へり。かくて彼等は永く候ひしが、何にも良からぬ事の發らざるを見て、その愚癡を以て彼等は神なりと云へり。そまたその處の邊に、島長その名はボアリアなる者の地所ありき。彼後我等を受けて三日の間懸に宿したり。然るにボアリアの父を熱病と病病とにて倒したれば、ボアリア彼の許に入り來り、且つ祈りて手をその上に按きて醫したり。尤是の故に此の事の發りたれば、島のうちなるその僚の弱き(身)をもてる人々も追み來りて、癒されたれば、一〇彼等も多くの敬をもて我等を敬ひ、また船出するるとき、彼等は(我等)のために、種々なる必要の物を(我等)の手にし置けり。

二 かくて三月の後、我等は此の島にて冬繼せし、テオスタク號なるアレキサンデリアの船にて出で、ニストラクサに運ばれ、三日運まれり。三 彼處より廻り往きてシギラに着き、かくて一日の後南風出でければ、二日めに我等はボテオカに到れり。四 そこで我等兄弟等を見出だせしとき、彼等に勸められて七日運まれり。またかくして我等はロアに到れり。五 然るに兄弟等は我等に就きての事を聞き、我等に違はんとてアツセイボクロ、またトラングヘルノラまで出で來りたれば、バクロはその人々を見て、神に感謝し、勇氣を得たり。

六 又また我等のロアに到りしとき、百人長は囚人等を軍隊長に付せり。まればバクロは彼等とて兵卒と共に、已自らに預ひて居ることを許された。七 かくて三日の後なりき、バクロはエダナ人の立立ちたる人々を召び集めて、彼等の集まりしとき、これに云へり、人々

兄弟等よ、我は民または先祖等の例に倅りて何をも爲ざりしに、エロホルマの四人として、ロー人の手に付された。一 彼等は我を調へしとき死の理由一つも我にあらざるによりて、我を去らしめんと判りたり。二 然るにエダナ人これに云ひ逆らひたれば、我は餘儀なくカイザルに上告せり、これ我が國人を断ぶべき事あるが故にあらず。三 此のゆへに汝等を見つ話だらんとて、汝等を召へるなり。そは我はイスマエルの望のために此の鎖を巻きつけられたればなり。三 乃ち彼等は彼に對ひていへり、我等エダナより汝に就きて文を受けたることな(、また此處に詣りし兄弟等のうち、誰も汝に就きて置しきことあるを報じ、若しくは話たりたる者なし。三 されど我等は汝の思ふところを、汝より聞くは然るべしと思ふなり。そは此の宗旨に就きては、何れの處にても云ひ逆はることの我等に知るればなり。三 かくて日を定めしとき、多くの入々宿にまで彼の許に來りたれば、彼は彼等に對ひて、朝より夕に至るまで殿に隠して、神の國を解き明し、且つモラセの掟より、また豫言者等の書よりして、イエスに就きての事を彼等に説き勸めたり。四 されば彼等は云はれたる事に就き伏せられしが、或る者は信ぜざりき。五 かくて彼等互に一致せずして去りたれば、バコロ一つの詞をいひけるは、良くも理なる靈は豫言者イザヤによりて我等の先祖等に語たり給へり。六 云ひ給ひけるは、此の民の許に往きていへ、聞くために汝等聞くならん、されど必ず解せず、また觀ることは汝等觀るならん、されど必ず覺えん。七 是は此の民の心は鈍り、傾き耳にて彼等

は聞き、またその目を開きたればなり。彼等は目にて見、また耳にて聞き、心は正しく、かゝて歸され、我が使徒を驚きんとを恐るなり。三人是の故に汝等に知らしめらるは、歸して國は國人に使はざれたることなり。彼等はこれを知りて、五かくて此等の事を彼の心必しとき、ユダヤ人は互に大に論じつまつたり。

三〇 またパウロは巴が借り受けたる家だ、全く二年の間居りて、彼の許に入り往くすべての者を迎へ、三坊げらるることなく、あらゆる大膽をもて神の國を宣へ、また主イエスキリストに就きての事を教へたり。

聖使徒等の行爲終り

ロー人に贈れる使徒パウロの書状

第一章

パウロ、イエスキリストの切實、召されたる使徒、神の福音のために別れたる者、三この福音は彼「神」の豫めその豫言者等によりて、その子に就きて預言うちに約束し給ひしところなり。三彼は例に備へばダビデの種より生まれ、四聖き靈に備へば死人の塵にて、力をもて神の子の「我等の主なるイエスキリストの印」を受け給へる者なり。五彼によりて我等はその名のために、すべての國人を信仰に傾けしむべく、惡と使徒の職を受けたり。六汝等もそのうちに在りて、イエスキリストの召を受けたるものなり。七「書状を」ローに在る神の聖せらるる者なる、召されたるすべての聖徒等に「贈る」。我等の父なる神及び主イエスキリストより、恵と平和と汝等に「あれ」。

八先づ我はイエスキリストによりて汝等すべてのために、我が嗣に感謝しまつ。そは汝等の信仰は全世界に宣傳せられたればなり。九そは神、その子の福音に於て、我が靈をもて服事するところの者は、我が如何に絶えず汝等を憐れ出でつ、一〇恒に諸のうちに如何にもしていつかは、幸に神の意にて、汝等の許に到ることを得んと祈願することを、我がために隠し給へばなり。二そは我は汝等を愛せんために、何物か憂なる賜物を汝等に領せんとて、

汝等を見んことを懸ひ慕へばなり。二是れ汝等のうちに在りて汝等と我との互の備仰によりて共に慰められたためなり。三されど兄弟よ、われ汝等の「これを」知らせるを欲せず、即ち庶々我は汝等の許に到り、他の國人のうちに於ての如く汝等のうちにても、多少の實を得んと企てたれど、今に至るまで妨げられしことを。四我はキリシヤ人にも、また埃及にも、また智者にも、また愚なる者にも負へる者なり。五かくの如く我はロマに在る汝等にも、福音を宣へんことを切に望むなり。六我はキリストの福音を罪とせさればなり、それはエヂヤ人を初とし、キリシヤ人に至るまで、すべて信する者を救ふべき神の力なればなり。七我は神の義は信仰より信仰に至るべく、そのうちに啓示せらるればなり、録して、義しき者は信仰にて生くべし、とあるが如し。

八我は神の怒は不義をもて、眞理を抑ふる人々の、すべての不虔と不潔との上に、天より啓示せらるればなり。九如何となれば、神の知らるべき事は彼等のうちに既に在りて、神は「これを」彼等に顯はし給ひたればなり。一〇我は彼の、目に見えぬ事、その無辯の力も、また神性も、造られたるものに世の創造より「この」かた「解せられて、明かに觀らるればなり。されば彼等のために辯解すべきなし。三如何となれば、彼等は神を知りつとも神としてこれに榮光を歸しまつらず、或ひは感謝せず、反つてその拙考は空しく、且つその悟なき心は暗きまされたればなり。三彼等は智き者たりと稱へて、愚なる者となれり。三また不朽なる神の榮

光を賜へて、朽つべき人、また愚、また問足のもの、また知ふもの形に榮しきものとなす。四我は彼等は神の眞理を易へて偽となし、創造し給ひし者よりも創造せられたる物を崇め、且つ「これに」服事す「されど」彼は永に觀せられます者なり。アメン。五此のゆへに神は彼等を恥づべき情に付し給へり、それは彼等の女子は自然の用を、自然に戻れる用となし、三また男子も等しく、女子の自然の用を措てて、互にその情慾に燃え、男子は男子をもて恥づべきことを行ひ、その迷の報を己自らに受けざるを得ざりき、ニまた彼等は其の知識のうちに神を保つことを最とせざるが故に、神は彼等を邪なる思に付して、爲すまじき事を爲すに委せ給へり。ニ又すべての不義、淫行、邪惡、慾心、惡意にて滿つる者、殺戮、淫誦、惡念の爲つる者、三譴責する者、非ざる者、神に憎まる者、侮る者、傲慢なる者、高言する者、惡を企つる者、双親に逆らふ者、三無識なる者、背約する者、無情なる者、執念深き者、無慈悲なる者なり。三彼等は神の義、即ちかくの如き事を行ふ者は、死罪に償する者なることを樂かに知りながら、これを爲すのみならず、反つてこれを行ふ者をも是とするなり。

第二章

かかるが故に、あかぬこととての人は、汝は辨明すべきなし。それは汝は他を裁くところをもて汝自身を罪に定むればなり。それは裁くところの「汝も」同じき事を行へばなり。三されど我等、神の義は眞理に償ひて、此の如き事を行ふ者の上

かるときに懸る給ふべし、とあるが如し。互われ人に備ひて云はん、我等の不義も神の義を應ぬば、我等何を謂ふべきや、怒を科し給ふ則は不義なるや。有るまじきことなり。然るとときんば、如何にして神は世を義き給ふべきや。そもし神の眞理われの偽にて「蔑められば、その榮光いやは増きば、何ぞ尙ほ我も罪人として裁かれんや。入されば我等が罰する如く、また義き事を來らしめんために、惡しき事を爲すべし、と我等が云ふと、或る者の確むる如きにあらず。かかる人に於ける裁は正し。

九されば何ぞや。我等勝れるや。我等勝れるや。全く無し。そは我録エブシヤ人も、すべて罪の下にあり、と激め罪つたればなり。一〇殺して、義しき者なし。一人もあるなし。一倍れる者なく、神を榮むる者なし。二かた逆れ、驕つて益なき者となれり。慈愛を爲す者なし、一人だになし。三その咽は開きたる處、その舌をもて語をなし、蝮の毒はその唇よりす。四彼等の口は罪と舌とにて滿ち、五その足は血を流さんために速し。六破壊と困苦とはその道にあり。七且つ彼等は平和の道を知らず。八その目の前に神の畏なし、とあるが如し。九されば我等捉の云ふところは、捉のうちにある者に語たることを知る。是れすべてこの口は閉がり、世はかな神の裁に服する者とならんためなり。一〇かかるが故に捉の行にすての肉は、彼の面前にて義とせられず、そは捉によりて罪は棄かに知らるればなり。三即二、されど今捉を離れて神の義は、捉と衆言者等とより證せられつ期はされたり。三即

ち神の義はイエスキリストの信仰によりて、信するすべての者のうちに、また「信する」すべての者の上に「顯はされたり、」それは少しも差別あらざればなり、三、それはすべての者を犯したれば、神の榮光を受くるに足らず、四、その惡にてキリストイエスに在る處によりて、價なしに義とせらるればなり。五、神はその堆へ怒をもて、過ぎこしかたの罪を見過ぐし給ひしゆべに、己の義の表のために彼を立てて、その血を償するによりて宥の供へ物とし給へり。六、これ「神が」己自ら義におはんため、またイエスの信仰の者を義とし給はんため、今の期に於てその義を表はし給はんとてなり。七、是の故に誇るところは何處にもあるや、辨はかれたり。如何なる捉によりてか、行のか。然らず、されど信仰の捉によりてなり。八、是の故に我等勘ふるに、人は捉の行を離れ、信仰にて義とせらるるなり。九、或ひは神はエブシヤ人のみの神ににおはしますや。然らず。國人の「神にてもおはす」や。然り、國人の神にてもおはします。一〇、されば信仰にて割禮ある者を義とし、また無割禮の者を、信仰によりて義とし給ふ神は、一におはします。三、是の故に我等は信仰によりて捉を無用ならしむるや。有るまじきことなり、されど捉を堅くするなり。

第四章

是の故に我等の父なるアブラハムは、肉に備ひて何を具出したりと謂ふべきや。ニ、そはアブラハムも「行にて義とせられたりしならんば、彼は誇るべき」ところあらればなり。されど神に對ひては、あるまじきことなし。三、聖書は何と云ふや。アブラハム

は神に任せまつり、されば彼に義と拘へられたり。四 憐れむ者に對する報は、善に稱ひたるものと拘へられず、されど義務に稱ひたるものなり。五 然るに憐れむ者も、不慮なる者を義と給ふ者を信する者に對して、その信仰を義と拘へ給ふなり。六 大罪も神が行なうして義と給ふ給ふところの人の福を、七 その不法を赦され、その罪を赦はる者は福なる者かな。八 主が必ず罪を罰へ給はざる人は、福なる者なるかな、と云ふが如し。九 是の故に此の福は割禮のうちにあるや、或ひは無割禮のうちにもあるや、それは我等はアラハムに對して、その信仰を義と拘へられたり、と云へばなり。一〇 されば如何に拘へられたるや。割禮ありてか、或ひは無割禮にてか。割禮ありてにあらざ、されど無割禮にてなり。一 且つ彼は無割禮にて「有らし」信仰の義の印として「割禮の徴を受けたり。これ彼は無割禮にて信するすべての人々の父たるため、また彼等に對しても、義と拘へらるべきためなり。二 かくて「彼は」唯割禮の人人に對して、割禮の父なるのみならず、尙ほ無割禮にて我等の父アラハムの信仰の跡を歩む人々に對しても「父なり。三 彼は、彼を世界の世嗣たらしむべし、とアラハムに對して或ひはその種に對して「せられたる」約束は捉によりてにあらざ、されど信仰の義によりてなればなり。四 彼は捉につける人々も世嗣たらんには、信仰は強しうせしめられ、約束も無用となりたればなり。五 彼は捉は怒を降せばなり。それは捉なきところには背もあらざればなり。六 此のゆゑに信仰にてなり、是れ約束をすべての種に、即ち唯捉につきてのみならず、

御ぼアラハムの信仰にきての「種にも」堅くせられんために、惡に稱ひてあらんためなり。七 彼は、われ汝をすべての國人の父となせり、と終されたる如く、その信する神、死人を活かす、有にあらざる物を有の如くに呼び給ふ「神」の「前」にて、我等すべての者の父なり。八 彼は望むべくもあらぬに、汝の種はかくの如くあるべし、と語ひ給ひしところに預ひて、多くの國人の父とならんために、望をもて信じたり。九 かくて彼は信仰に於ては稱はざれば、約束を百歳に及びて已が體の既に死人となりしと、争うの始の死にたるをつらと思ひたり。一〇 されど不信仰をもて神の約束を疑はず、反つて神に榮光を歸しまつりつ、二 且つ神が約束し給ひしことは、これを爲し給ふことを得べきことを堅うせられつ、信仰に強うせられたり。三 かかるが故に義と拘へられたり。三 されど彼のために拘へられたりとは、彼のゆゑのみに敏されしにあらざ、四 されど我等のゆゑにて、死人のうちより我等の主なるイエスを起し給ひし者を信する人々のために、將に拘へられんとするなり。五 彼は我等の背のゆゑに待され、また我等の義とせらるるために起され給ひたり。六 是の故に我等は信仰にて義とせられたれば、我等の主イエスキリストによりて神に對して平和あり。七 我等彼によりて信仰にて、我等が立つところの此の恵に入ることを得たれば、神の榮光を望みて誇らん。八 唯それのみならず、憐れむのうちにも誇るなり。九 彼は、疑は忍耐を廢し、一〇 また忍耐は無識を、また捉は善を「廢し」また稱

第五章

是の故に我等は信仰にて義とせられたれば、我等の主イエスキリストによりて神に對して平和あり。二 我等彼によりて信仰にて、我等が立つところの此の恵に入ることを得たれば、神の榮光を望みて誇らん。三 唯それのみならず、憐れむのうちに